

*

大通りから一つ入ったところに入り口があるのは、どこにもありそうなる3階建ての貧相な雑居ビルらしき建物。しかし、1階は合同会社 Endeaz-vous というベンチャー企業の本社で、2階3階は合同会社 Endeaz-vous というベンチャー企業の事務所である。つまり要するに、このビルはまるまる合同会社 Endeaz-vous のものだ。警備会社か工事会社でもなければ、このビルに入るのは Endeaz-vous 関係者をおいて他にない。

Endeaz-vous と書いて誰も読める人はいないから、よほど改まった時でなければ僕はカタカナでエンデブーと書く。エンデバー (endeavor) とランデブー (rendez-vous) のかばん語だが、これをセンスがいいと言う人は考案者の社長を除けば読める人と同じくらい少ない。

会社としてのホームページや連絡先を一切インターネットに流していないから、この会社の存在は、このビルを訪れるか、同業者として交流を持つか、登記簿を漁るしかしないと知ることはできない。そんな情報化社会に真っ向から逆らうかの如きこの会社の設立目的は、しかし、文化としての仮想現実の定着に資することだ。

では何故そのような存在を秘匿する必要があるのか。その答えは、この部屋を見渡せと言えば足りるだろう。

強いて言うなら小学校の放送室だ。わけのわからないボタンのたくさんついた機材があって、壁は吸音のための穴だらけだ。そして今は何も映っていないモニターがいくつか。機材の向こうには、ガラスで仕切られているが広い空間が広がっている。その空間はこっこの部屋よりも優秀な防音設備がなされている。ここは、収録スタ

ジオだ。

しかもただのスタジオではない。簡単に言えば、エンデブーは V t u b e r の集団が所属する事務所であり、ここはそのスタジオで、そしてさっきまで、ここを使ったコラボ放送配信があったのだ。

V t u b e r は芸能人だ。その保護のために、スタジオの場所、ひいては会社の存在すらも、そう簡単にバレるわけにはいかない。秘匿の理由はそういうことだ。

さて、さっきまであった配信は闇鍋をつつくという企画で、なかなかに独創的な試みだったのだが、誰も予想しなかったことが起きて、配信は中止になってしまった。配信が中止になった後も、僕たちはスタジオに留まる必要があった。

収録現場には、目立つものとしては、こたつ、その上の鍋と食器たち。スタジオの端には椅子に座る3人のタレント。表情は様々だ。泣くもの、慰めるもの、俯くもの。もう片側の部屋の隅では、片膝をついたスタッフが一、機械を操作している。機械は橙が嫌なほど鮮やかで、側面にラテン文字3字。

『A E D D』。

そのコードは、毛布で簡易ベッドと化した長椅子の上の、この空間で最も目を引く物体に繋がれていた。

部屋の中央に、女が倒れている。
起き上がることはない。

安達有紀。

さっきまで配信をしていた、その一人だった。

罰を望んで、悔いのみ残り

葉校照月

*

「被害者は安達有紀。ユアチューブで『寝ノ神こもり』という名で活動しているVtuber……ええと、Vtuberですか。娘から聞いたことがありますね、まあ一種のタレント……という認識でよろしいですか、荻野さん」

そう言うのは、恰幅のいい中年過ぎくらいの男で、藤川警部と言うらしい。ちなみに僕に同意を求めたのは、社長のいない今この場においては僕がこの場の代表者にして、現場に近かった一人だからだ。

「まあ、そうですね。概ねその認識で間違っていないと思います」

実際間違っていない。もしVtuberの専門知識が必要になったら、その都度説明すればいいだけだ。

「わかりました。寝ノ神こもりが芸名なわけですね。そして有紀さんは犯行当時、他のタレントとともに闇鍋の企画を配信、生放送していた……と」

藤川警部はそう言って、部屋の一角で座っていた三人組の方を見る。彼女たちこそ、安達有紀の死を目の前で見ていた、共演者。

失礼ですがそちらからお名前を、と藤川警部が促すと、まず名乗り出たのは、いちばんしつかりとした人だ。

「鹿島愛です。シエリー・シエレンベルクとして、失礼として、この会社と契約を結び活動しています」

おや噛んだ、と思った。鹿島はいつもはきはぎとしていて、それでいながら冷静沈着。育ちのいいどこかの令嬢のような印象のある人間で、Vtuberシエリーの少し高飛車なお嬢様という設定にとても合う。完璧主義の彼女が自己紹介を噛むなんて珍しい。相当に取り乱し

ているのだろう。心なしか、表情も何かを思い詰めているようだ。

次に名乗ったのは、一番大人びた人だった。

「青原楓佳と言います。こもりちゃん……有紀ちゃんの隣にいました、深山幽花です。」

青原楓佳。僕が普段からマネジメントをしている彼女は、廃神社の幽霊巫女として活動している。酒乱にしてスタイルがよく、色々と駄目な大人のおねえさんというふうなファンからは思われているが、裏での彼女、つまり青原楓佳は極めて真面目だ。酒乱だけど。今日は少し目の下にクマが見えている。配信はしていなかったはずだが、昨日から寝ていないようだ。

最後に名乗ったのは、演技なのか本当なのかわからないほど常におどおどしている人だ。

「か、柏木梨々です。秋宮雛という名前で、みんなとお仕事させてもらっています」

一番若く、一番小柄。一番小心者で、そして一番愛される。わが社では社長に次ぐ登録者数の小動物な妹系Vtuber、秋宮雛。その性格はリアルでもほぼ変わらないが、実は芯の強いしつかりとした人だ、と感じる。さつきからずつと泣きじやくつていたのだが、青原の献身的な慰めで、なんとか納まったようだ。それもあってか、疲れが見える。普段であればそれを、びくびくしているという印象の中にすっかり隠してしまっているのだが。

これら三人に被害者の安達有紀が演じる寝ノ神こもりが加わって、ととらーくというユニットを構成していた。

寝ノ神こもりは名前からもわかるように怠惰な女神さまで、関西弁の使い手である。ちなみに、深山幽花の仕える神ではないらしい。

「他に、現場に居合わせた……そうですね、例えば配信の為に撮影をしていたスタッフの方などは？」

藤川警部の新たな問いかけには、僕も答えねばならぬものだったが、僕が名乗り出るよりも前にもう一人のマネージャーが声を上げる。バリバリのキャリアウーマンらしき出で立ちの長身の女性で、さつきからずつと、一日中不幸なことしかない人がまた不幸なことに出会ったときのように腕を組み苦い顔をしている。

「私とこの荻野君は4人たちの付き人というか、マネージャーとして現場にいました。私は赤羽根翔子です、安達さんと柏木さんの担当をしていました」

そこまで言うのと翔子さんは僕に目を向けて、さあ早くお前も喋れよとも言うように促した。別にそんなことをされずとも最初からそのつもりだったのだが。

「えっと、翔子さんの紹介の通り、自分もマネージャーです。先ほども挨拶しましたが、荻野興隆、ここの副社長です。普段はその青原楓佳のマネージャーをしています。一週間ほど前から鹿島愛のマネージメントも代理でしています」

「代理、ですか。ということとは本来は違われる？」

「柏木の本来のマネージャーは佐久間という人で、交通事故で入院中なんです。その後一時期赤羽根さんがマネージャーをしていたものの、彼女がマネージメントするのが3人に対して僕は1人になってしまったので、分担ということで」

「なるほど。では、他のスタッフの方は」

「音響室みたいにスタジオの外から中を見ていた人はい

ましたが、スタジオにいたのは配信に参加した4人と、そばで待機していた僕らマネージャー2人だけです」

「ほう、少なくないですか」

「今回は最初からラジオのように、カメラを一切使わない予定だったもので。それにバイノーラルで鍋という企画の都合上、できる限り雑音の入る余地を減らしたかったです」

なるほどなるほど、と藤川警部は僕への取り調べのよくな聞き込みを中断する。悪いことを何一つしていないのに、警察に根掘り葉掘り何かを聞かれるというのは心臓に悪い心地がする。

安達有紀はなぜ倒れたか。安達有紀にアレルギーはない。他の人には害が及んでいないから食中毒でもない。

そんな消去法の果てに導かれる一つの仮説。それが、毒を盛られたことだった。でも誰がなぜ、何で、どうやってということが全く分からないから、これだって消去ぎれそうな話だ。だが、誰も遭遇したことのない事実の前に、皆、自分に過失はないと思いたがっている。誰かが悪意をもっていた。きつと持ってきた闇鍋食材が悪いんじゃない。きつと自分が間違えて毒のあるものを鍋に入れていいと判断したんじゃない。

やや重い雰囲気相場を支配する中で、藤川警部はおもむろに口を開いた。

「まだ何もわかりませんが、仮に事件とした場合、犯行推定時刻……つまり闇鍋のため収録部屋の電源を落としていた時に収録部屋にいたのは、被害者を除けば君たち5人。ですね」

その一言には引く掛かりを覚えた、その言い方じゃあ、まるで……、

「まるで、私達の中に犯人がいるかも、と言うかのようですね」

まさに自分が思っていたことを、少し怒気をはらんで代弁してくれたのは青原だった。対して藤川警部は、ちよつと配慮に欠けてしまった、と言った顔を一瞬だけして、すぐに話を逸らすことにしたようで、逆に僕らに全然大差を問いかける。

「まあまあ、そう怒らないでください。すべての可能性を探ろうとしているだけです。あー、そういえば。この会社の代表はどちらですか。社長さんはいらっしやいますか」

僕が返す。

「社長はそもそも来ていませんが、ひよつとしたら——」
そう言い終えることはできずに、階段の方で声がした。

「どけ！ どいてくれ！ 私は被害者の雇用者だぞ！」

その声と、内容からすぐにわかる傍若無人ぶりは、

「——今来ましたね」

社長が来たことを、如実に示すものだった。

藤川警部は、社長の方を向いて、どうも警視庁の藤川ですこの度は、と挨拶をして、アツと驚いた声を出す。

次の瞬間には、僕は胸倉をガツと掴まれていた。

「荻野オ！ お前が責任者だろうがぎつっけんア！ 窓から落っこすぞお前エー！」

社長は相当の剣幕でまくしたててきたが、それでも目には涙がたまっているのが見て取れた。それに気づいてしまったからには、今そんなこと言われても自分にはどうしようもないじゃないですか、と反論したい気持ちを

抑えるしかない。

「ちよつと、言い争うのはやめてください……そして、」

藤川警部が止めに入ってくれた。

……ん？ 藤川？

「和花。和花が……いや。藤川和花さん。あなたが、この社長ですか」

藤川警部は、まだ名乗ってもいない社長を下の名前で呼んだ。まるで家庭で娘を呼ぶかのように。

その声を聴いて、我らが社長・藤川和花は、

「と、う……さん」

今までに見たこともない表情。それこそ目を丸くするという表現がここのままでの射ていることもどうそうないだろうなという表情で、呆然と藤川警部を、自分の父親を見つめている。

藤川和花。天道測理の名でV t u b e r活動をする傍ら、事務所の主権として後進の育成も行う我々が社長は大切なその後進のひとりや失い、父親に相対していた。

*

19時から始まったバイノーラルのラジオとして配信された今回の企画は、寝ノ神こもりが体調不良を訴え離脱したあと、そのまま配信そのものが中止になった。今頃SNSは憶測でもちきりだろうが、見たくもない。今は配信は非公開になっていて、切り抜きの為に録画していた人でもなければその場を見ることはできないだろうが、我々は当事者なので配信の内容を再確認することができる。今は、藤川警部と藤川社長の立会いの下、配信をプレイバックする。犯行の瞬間が収められているかもしれない配信。安達有紀の最後の肉声が記録されている配信。

しばらくの待機画面が流れた後に、画面は四人の画像とフリー素材のコタツと鍋のイラストが用意されたものになる。他にもツイート用ハッシュタグとかBAN回避の流れるメッセージなどがあるが、あつて当然のものであつて特別ではないし、よつて特記すべきこともない。

イラスト画面が移るとすぐに、四人の声が入る。こんにちは、音大丈夫ですか、といった調整が完了すると、最初に口を開くのが、シェリー・シエレンベルク。高飛車お嬢様らしい、少しツンデレを想起させるような、とげが明確にあるわけではないがオブラートがあるわけでもない言い回しだ。

『…さて、今日は何するのよ』

『いや、なんというかな、ウチたちまだ完全には仲良くなつてないやん』

『グループ結成してもう一年近いのに』

『でな、やっぱな、鍋！ 鍋つくくんが友情の近道やね

ん。徳川秀吉もせやつて言つてたで』

『だつ、誰それ…』

『でな、用意したで！ 闇鍋企画を!!』

『…なんで???』

ややきつめの口調でなんだかんだまとめ役になるのがシェリー・シエレンベルク、企画者ということになっている。閑西弁が寝ノ神こもり、冷静にツッコミを入れるのが深山幽花、おどとして聞くだけで引つ込み思案とわかる声が秋宮雛。声色もそこそこ違うのでそれだけでも区別できるが、口調も非常に分かりやすい。ちなみに、座り順は今の通り、シェリー・寝ノ神・深山・秋宮の順が反時計回りだ。なお、彼女らはあたかも闇鍋企画を今知らされたような入りだが、実際には事前から綿密に打ち合わせのあつた一大企画で、要するにこの冒頭はただの茶番である。実際、皆思い思いの闇鍋食卓を持ち寄っている。

『ちなみにな、もうそこにウチらのマネージャーさんが調理をはじめてんねんで、ほらあそこ』

『見たことのない笑顔、してる…』

『嫌な予感しかないわね。ちゃんとしたもの持つてきたんでしょうね、みんな?』

『当たり前やないか、変なもんなんてあらへんあらへん』

『まあ、鍋にあうかはわからないけど』

『…うん、まあ、た、ぶん…』

『…なるほど、聞かない方がよかつたわね』

この調理を担当したのが僕と翔子さんだ。正直僕はこの時点で今回の企画は大変なことになると思っていた。

鍋から、あまり鍋っぽくない匂いが既に漂っていたからだ。だから張り付いたような圧倒的に不審な表情しかできなかったのだ。このへんで一度藤川警部がこの時点で被害者に不審なところは、と確認する。だが、特に声をあげる者はいない。僕も特に変ではないと思う。そして再び映像が流される。

『うわつ、マジで真つ暗になんねんな。舐めてたわ』

『結構暗いわね…夜目が利く性質でよかつたわ』

『照明さんが本気出してますね…』

『…わい…』

電気が落ちた…ように聞こえると思う。でも、実はそうではない。この時点で、各メンバー全員にアイマスクが配布され、視界が奪われていたのだ。これは急遽の措置だった。仕様上、電気を落としてから端つこで調理されていた鍋を皆の方に持つていかなければならなかったが、照明が落とされた状態では、あまりに暗すぎて鍋の輸送と配膳が困難だったのだ。そのため、食べる直前まではアイマスクをさせて当事者たちの視界だけを奪い、鍋や具の配膳だけはマネージャーが不自由なくできるよになつていた。この辺の事情は全て皆に共有する。

しばらくして、各々がおつ、と声を上げる。ようやく鍋がやつてきたのだ。火事防止の為に加熱調理は自分らマネージャーがした。だが食べられはしない。でも僕は正直それがうれしい。各々の声があつ、に変わったところからその理由は察してほしい。

『匂いが…』

『匂いがアカンなあ…』

『甘い……』

『もつこの匂いで分かるのよ！ 誰よチョコレート持ってきたのは！ 名乗り出なさいよ、最初に食べさせてあげるわ！』

『……』

『ち、ちよつと黙らないでよ、配信者でしょ』

『ちやうねん、ほんまに食べたないんや』

『いくらなんでも、チョコはねえ……』

『こつこの匂い、鍋……なのかな……』

『配信者精神を何処に遣ったのよ、軟弱ね！ 良いわ、皆が嫌って言うならこつこつこの私がやややつてやろうじゃないのっ、かか感謝なさい！』

『震えてるで声。……まあ、ウチらも行きますか』

実は、ここで熱々の鍋に手をべつたりくつつけたりでもしたら大変なことになるため、一杯目に関しては、翔子さんがあらかじめ各々の分を入れていて、二杯目以降は——欲しければの話だが——都度マネージャーを呼ぶという仕組みになっている。

『よし、行くで』

『……うう、食べたくない』

『ぶつかるといけないから順番がいいわね』

『せやね。そんじや、ウチからで』

各自不平不満を言いつつもそれぞれのお椀に取っつく——ふりをしている。この時間は各自その場で座って動かないで、マネージャーが配膳する。鍋そのものを机に置いたのは僕で、翔子さんが鍋から取った具たちを配膳した。当然僕の方が先に終わるので元マネーシ

ャー待機位置に戻った。

翔子さんもすぐに戻ってきた。そして、本当に電気が落とされる。この暗さは本物だ。なんだって端で見ているマネージャーや外のスタッフ陣は、部屋の中心の四人のシルエットをうかがうことすら怪しいくらいなんだから。というか、外のスタッフ陣はこの時点でカーテンをかけたから中はそもそも見えない。真ん中のVtube r達だって、アイマスクを外したところだからうじて手元と鍋、そしてお椀が見える程度のはず。われらが社長が本気で手掛けた照明分野。Vtube rに照明などみじんも必要ないはずだったのだが、だから大事なんだわかってないな荻野は、と笑われたのを思い出す。

このとき最後に配膳されたのはシェリーという風に決まっていた。シェリーのところの配膳が終われば、翔子さんがシェリーの肩を叩いて、それがいただきまます言う合図となる寸法だ。

シェリーがその合図を受けて、はい、じゃあみんな配膳が終わったみたいだね、と言うのが合図で皆アイマスクを外すという打ち合わせになっているが、はつきり言うてアイマスクを外したかどうかはもうわからない。正直なことを言えば、この時点で僕は——そしてたぶん翔子さんも——この暗さ、やりすぎたなと思っていて。一寸先は闇とはまさにこのことと言ったような状態で、夜目が利かない性格の自分はまったくもって周りが分からない。少し離れているとはいえず、翔子さんが隣にいないのかもわからなかった。分かるのは自分が今壁に寄りかかっているという触覚の情報だけだった。

いただきますという掛け声——ラジオ配信だから今から食べ始めますという情報を視聴者に提供するのにとても重要なのだ——をして、そうして、最後の晚餐が始ま

った。

『ん、だれかウチの顔近くに何か近づけた？ 手で払ってもうた……虫か？』

『うっ、半端に溶けたチョコに絡んでるのは……梅干しよね、この味。なんでもの持ってきたのよ……』

『このプチプチ……タピオカ？』

『いや、雛ちゃん食べたのと同じならチアシードね。誰のかわかる気がするわ』

『ちよつと、誰のかが当てる大会は最後よ！』

『あつなんやこれ、紙か？ いや、オブラートやな』

といったように、まあ阿鼻叫喚ではあるが問題はないと思っていた配信が続いていく。

しかし、だ。15分経つか経たないか、つまり、時計はまだ19時半くらいの時刻だった。少し前から『心なしか舌痺れてきたわ』と言っていた安達が、強い腹痛を訴え始めたのである。まあ、鍋の中身からして誰かが腹を壊しても仕方ないとは思っていたので、この時点では誰も深刻には考えていなかった。もしもの為に最低限の明かりはマネージャーは持っていたから、補助として翔子さんが同伴して安達が出て行った。残された三人のメンバーたちも、おなか壊すの仕方ないくらいヤバいからね、と苦笑していた。ちなみに、既に皆の食指は鈍り始めていた。

それから10分くらいのうちに、翔子さんは血相を変えて——あまり見えなかったが多分そうだった——、配信の邪魔にならぬよう静かに飛んできた。そして、こつ耳打ちをした。

「有紀ちゃん、食中毒かもしれない。配信を止めましょー」

その判断は、現場責任者で副社長の僕によってのみ下すことのできるものだった。食中毒が出たということは、他の人もこれからそうなる可能性がある。中止の判断に踏み切るには十分すぎる理由だった。

詳細は伝えずに、ただ有紀の腹痛がひどいので中止にします、とだけ鹿島に言っと、

『突然だけど、皆。こもりちゃんが本格的におなかを壊したみたいだから、大事をとって配信を中断するわ。スパーチャットの読み上げは次回みんなでやることにしましょう。もうしわけないわね。それじゃあ、また一緒に遊びましょう。バイバイっ』

すぐにそう言ってくれた。流石はシェリー。その收拾は、とても冷静だった。時計は19時42分を指していた。

安達は、舌の痺れが四肢に達した後、腹痛と動悸・吐き気を催して部屋から退出したが、配信を終わらせた後また部屋に運ばれた。立てないし、言語や意識も明瞭ではなかった。この時点で相当に嘔吐をしていたのだろうという匂いが彼女からした。警察の到着と同時に病院に搬送されたが、その容体が思わしくないということは、素人目にも明らかだった。

*

20時半が近い。藤川警部の聞き込みは、遂に具体的な領域へと踏み込み始めた。何よりもまず、持ち込まれた具材の調査から始まる。毒だとすれば鍋に何かしらの原因があるのは明らかだからだ。とはいっても、翔子さんと僕が確認済みだから、改めて本人から聞く以上の意味は実はない。ただし、ここにいる3人にとっては、誰が何を持ってきたかを知る最初の機会だった。この3人の誰も、まさか警察立会いの下、全く笑えない状況でネタばらしフェイスに移るとは思っていなかっただろう。

まずはシェリー・シレンベルク、鹿島愛からだ。

「私は牛肉、豆腐、山菜、そしてチアシードです」

チアシードの袋をスツと出して、警官でないみんなはやっぱりお前かという顔をした。彼女はチアシードが大好きだ。病的なまでにハマっている。そして最近量が増えている気がする。佐久間さんもよくチアシードのブランドを指定されているが通販で仕入れるしかないんだよと苦笑交じりで言っていた。鍋にチアシードを入れるのが果たして正しいのか分からないが、牛肉・豆腐・山菜というあまりにも常識的であまりにも面白味に欠ける具材たちから見れば、十分にネタに走っているのかもしれない。まあ、そんなチアシードを一切ネタだと思つてなさそうなのが恐ろしいところだ。

続いて深山巒花と青原楓佳。

「塩鮭、梅干し、甘栗、甘酒。本当はブランデー入れたかったのだけど」

青原楓佳の持ってきた具材。こちらも、そこまで常識外ではない気がする。梅干しを鍋に入れるかは知らない。

ちなみに、ブランデーを入れたかった、というのは本気で言っている。僕が止めたのだ。酒乱の彼女らしいが、お酒はいいですか、とちゃんと事前に聞いてきたから、ひよっとしたらダメ元精神だったのかもしれない。まあ、ダメ元精神でも酒はどうかと思うのだが、事前に聞いてくる常識のある人間で本当に良かった。……ん、甘酒？

最後に秋宮雛……つまり柏木梨々の具材。

「わ、私がつけてきたのは、キャベツ、豆乳、甘栗、チヨコレート」

「あんたか！」

秋宮雛がチヨコレートを持ってきた、これは意外だった。僕も調理場でびっくりした。割と常識の範囲内をいついてくるだろうと思っていたから。そう、闇鍋と言つても、正直とらーくのメンバー的に変なものにはならないただろうと思つていたのだが、そうでもなかった。それでも、鹿島愛のチアシード、青原楓佳の甘酒に比べても、秋宮雛のチヨコレートは衝撃的だった。

そして、安達有紀。警部がこう言うので、僕も答える。「残ったのが、被害者の持ち込んだものですか。被害者は何を？」

「ええとたしか、湯葉、ポン酢、ポテトチップス……でしたっけ。4つずつ持つてくる話でしたが、あと一つは……」

「山菜は安達有紀も持つてきてたわ」

「ああ、そうでしたね。ありがと翔子さん」

全員の具材の確認が終わった。当然ながら、全て僕らマネージャー陣は知っていたものだ。18時には参加者

4人全員が具材を僕らに提出してくれた。これ以外のものが入っているとしたら、それは強烈な意味を伴うことになる。だから、

「……オブラートを入れたのは、誰だ？」

社長の独り言は、もつともすぎるものだった。

安達が発症の直前に残っていた、オブラートらしきものがあるという発言。もちろん、そんなものを具材として持ち込んだものはいないはずだ。翔子さんも言う。

「私と荻野君が保証します。オブラートを具材として持ち込もうとした人はいません」

「……となると、秘密でオブラートを持ちこんだものがある可能性があるわけですか？」

「いや、警部さん。オブラート自体は少し前のお菓子作り企画の時に買ったけど使わなかったのがあるんです。

荻野君、オブラートってどこにしまったっけ」

「え？ 普通にキッチンだと思えますけど……」

と言うと、翔子さんがキッチンの方へ確認に向かう。

藤川警部も数人の刑事を引き連れて去る。とは言っても、キッチンはすぐそこだ。数分もしないうちに戻って来る。

「……えー、いくつかの引き出しを確認しましたが、そのようなものはありませんでした。あとでもう少し探させますが、これがいつ無くなったかは分かりませんが、心当たりのある方は？ ……いない？ では、誰かが今日この犯行に使うために持ち去ったのではないですか？」

藤川警部の発言は、空気を重くした。誰が持ち去ったのか？ その疑問は、藤川警部に、そしてそれ以外の皆の脳内に、「持ち物検査」という五文字をちらつかせ始めた。

その時。ずんとした空気を引き裂く、澄んだ酒好きの声。

「それ、もしかしてトリカブトではないですか？」

青原楓佳の声だった。彼女の指さす先には、安達が使っていたお椀がある。お椀は機の相当端っこに置かれていて、隣の人の領域に半ば干渉している。箸はそれなりに綺麗に置かれていて二つともがそんなお椀から反対の方向をまっすぐ指していた。お椀に滲えられた汁物の表面に数枚の葉っぱが、まるで自分はお吸い物の三つ葉ですとでも言わんばかりに浮いている。だが明らかにサイズがおかしい。三つ葉を名乗れる小さきではない。

「ふむ、確かに似て見えますな」

近寄った藤川警部がそう言うのと、社長が次いで、

「トリカブトの毒性物質、アコニチンの中毒症状は口まわりから四肢に拡大していくしびれに始まり、次第に嘔吐、腹痛、下痢、起立不能、言語障害と悪化する」

さらにそのあとを青原が補足する。

「さらに不整脈、血圧と体温が低下して、最後は痙攣から呼吸不全で、早ければ一時間で死んじゃう……即効性の強い毒よ。そして、」

最後に言葉を継いだのは、やはり藤川警部だった。

「安達さんの症状に、そっくりなようですね」

空気が引き裂かれれば、良い空気になるとは限らない。

さらに重い空間が、無慈悲に僕らを包むことだってあるのだ。そして、柏木。

「な、なんでそんなものが、有紀ちゃんのお椀に」社長が返す。

「トリカブトの葉は山菜ニリンソウとしばしば間違えられ、誤食による食中毒事故が頻発する植物だ」

「さつ、山菜……じゃあ、まさか……」

「ああ。事故か故意かはともかく、トリカブトを食べて死んだのであれば、そのトリカブトは……」

誰かがそうしたというわけでもなく、いたって自然な流れで、皆の眼はゆっくりと、ある方向に向けられた。

「あなた由来かもしれないですね」

山菜を、持ってきていた人に。

そう、鹿島愛に。

「ちが、違う……私は、そんなこと……そんなわけない……嘘……」

鹿島は向けられたいくつもの視線が自分を雁字搦めに縛ってこようとすることを振り払うかのように、涙の溜まりつつある瞳を強く閉じ、首を振って、数歩後ずかったが、

「嘘は貴方よ。貴方が私の安達有紀を殺したんじゃないのー？ 何とか言いなさいよっ、この……！」

翔子さんが、すごい形相で胸倉を掴んで前後に振ろうとする。マネージャーとしてタレントにすべき行動ではないが、一瞬、誰も止められない。止めたのは社長だった。

「待て、赤羽根。山菜は安達だって持ってきた。誤って持ってきたものを自分で食べた可能性がある」

その一言に、翔子さんはそんなことあるだろうかという顔をしつつも、藤川警部も制止に入って、矛を収めた。藤川警部は、

「すべては、持ち物検査で分かるかもしれません。協
力いただけますか」

と、言った。誰も拒否など出来やしなかった。

持ち物検査が始まる直前。藤川警部に連絡が入ると、
彼は一つ溜息をついた後、亡くなったそうです、とだけ
言った。あまりにも無味乾燥とした死亡報告に、全員の
表情は一層悲しいように変化した。その中でも特に、鹿
島が零した、「なんでよ……」という声が耳から離れな
かった。

*

持ち物検査、具体的には手荷物の検査だ。荷物の置き
場所はどこかと問われたので、社長が言うのを待つても
なく返す。

「更衣室ですね。まあ事実上のロッカールームです。特
に着替えることもないですからね。僕は男なので入った
ことはありませんが」

更衣室には、鍵の類がない。使う人間は限られている
からいいだろ金もないし、と創業直後の社長が言ってい
た。社長のこだわりポイントはイマイチよくわからない。
女子更衣室は女子トイレのすぐ近くにあるため、心な
しか嘔吐物の饅えた匂いがしないでもない。そういうえば、
青原が警察が来る前にトイレに行っていた。通報後、収
録部屋から出たのは、マネージャー以外では彼女だけだ
った。今以上に匂いが強かっただろうが、纏う雰囲気は
今の方が重く悲しく感じられるだろう。

着替えがあるわけでもないし、そもそもそういうこと
に文句を言っていられる状態でもないで、女子更衣室
に僕や藤川警部の入るのを咎める人はいなかった。男子
更衣室の僕の荷物は後回しらしい。男子更衣室と男子
トイレは、女子のそれとは別の位置にあるからかもし
れない。

真っ先に鞆を検められたのは翔子さんだった。鞆から
出てきた中で、特にふつうは入っていないと思われたの
は、4つ。ひとつはタオルである。なんてことはないフ
エイスタオルなのだが、鍋をする通り今は冬である。わ
ざわざ持ってくるだろうか、と疑問がついたものの、別
にだから何だということもないため、次の検分に移った。

「ミニトマトと、モロヘイヤの種。家庭菜園を？」

「ええ。ここに来る前、青原ちゃんと一緒に。だから青
原ちゃんも買ってるわよ。私のとは違うけど」

「あとは、暗視スコープ……ですか」

「そうなのよ。念のため持ってきたのだけれども、肝心
の持ち込むのを忘れてしまって、結局使えず。もし使え
たら、こんなことにもならなかったのかもしれないわね」
「持ってきたのに忘れる理由がありますか？」

「その通りです、せっかく準備してきたのに」
鋭い質問をされた翔子さんは、珍しくしよぼんとする
様子を見せた。

隠滅などが起こらぬよう、更衣室に入って鞆を開ける
のは一人ずつで、それを警官数人と社長と僕が立ち会う
という形式がとられていた。僕がここにいていいのかわ
くわからないが、社長がついて来いと言うのだから仕方
ない。続いて入ってきたのは青原だった。

青原の表情は、やはり藤川警部に挨拶していた時と同
様にどこか疲れたようにも見える。状況を考えれば当然
だが、どこかそれ以上の疲れを感じるような気がする。

「と言っても、私は大したものを入れてませんよ。スマ
ホ、財布、キーケース、化粧ポーチ、アトマイザー、カ
ラーパレット、リップ、まあこの辺は普通ですよ。あ
とはこれ、さっき赤羽根さんと一緒に園芸店に行ったん
です、で、これ買いました」

「枝豆、オクラの種ですか」

「枝豆はツマミの自給自足だな？」

「さ、さあ、なんのことでしょ？……」

見え透いていた意図を見透かされた青原は、決まりの

悪そうに頬を掻いた。

次は鹿島愛だった。表情はカチコチに固まっている。冷静に配信を終わらせたシェリーはどこかに消えてしまった。配信が終わった直後からこう感じる。安達の容体が想像以上に悪かったらしい。しかも今は死んだという報告すらある。同僚が死んでしまったのだ。それ以来ずっと何か思い詰めているかのような悲痛な表情が晴れないのも、当然だろう。

「これが私のバッグです……開けますね」
そうやって彼女がショルダーバッグのジッパーを開けていくと、
「えっ?」

誰かがそう言った。開いたバッグのその中、一番目に飛び込んできたのは、

封の切られた四角いオブラートの袋。

何か白い粉の入っていた形跡のある瓶。

半透明の袋に入った、葉っぱたち。

青原が見つけたあの葉っぱとそっくりな葉っぱ。

全員が二の句を継げずに、それっきとした犯罪の証拠物に釘付けになっていた。こんなにも明らかな証拠を鞆の中に転がすのか、と。

だが、少しだけ視線を外して見た鹿島の顔は。

「……………?」

到底演技と思えないような、衝撃を浮かべていた。

誰かが、この人をハメた。そう思った。

*

鹿島の鞆から犯行道具らしきものが出現したことは、その後控えていた柏木と僕の持ち物検査を吹っ飛ばすくらい、その場にいた人々に衝撃を与えた。柏木と青原はそれぞれ信じられないといった表情をして、立ち尽くし項垂れる鹿島の方を見る。翔子さんはやっぱりなど言っただけで掴みかかろうとするが、藤川警部に止められる。社長は、攻撃的でも同情的でもなく、ただただ難しい表情をしている。

「いまある情報から言えば、鹿島愛さんは瓶入りの毒の粉——おそらくアコニチンでしょう——をオブラートに包ませ、電気の消えた闇鍋という状況を使って、左隣にいた被害者のお腕に入れたということになりますな。しかし」

藤川警部は続けて言う。

「ならどうして、葉っぱをもってくる必要があったのでしょうか。粉があるならそれでいいのに」

「それはおそろく……」

社長が何か言おうとしたのを、翔子さんが割り込んだ。

「二リンソウと間違えた事故に見せかけるため、じゃないかしら? そうでしょ、この殺人者」

殺人者。その言葉はあまりにも重すぎる。だが、翔子さんは自身がマネージャーを務めるその人が死んで、取り乱しているのだろう。その重苦しい言葉を平然と使うのを、誰も制止できやしない。

だが、それはその言葉の向けられた相手、鹿島が犯人であることイコールではないはずだ。僕は鹿島がハメられていると思っている。それに何より、バッグの中に

堂々と犯行道具が置かれているというのは、あまりにも杜撰だ。彼女であれば、せめて隠す手段を講じるはずなのだ。バッグのジッパーを開けた瞬間明らかに怪しいブツが目に見え込んでくるようなことはしなさそうなのだ。社長もおそろく同じことを考えていたようで、何も言わずに鹿島のほうを見ている。

だが社長も、彼女の口を次について出るその言葉は、予測していなかっただろう。だって、

「……………うん。……はい、それは私のもので間違いありません。私が彼女にトリカブトを盛りました」

彼女は、罪を自供し始めたのだから。

「細かいことを言うつもりはありません。私は自宅からトリカブトを持ってきて、それを毒としました。か鞆を見てください、ほら……底にフラスナーで隠しポケットがあるでしょう。ここに入れていたんです。……ああ、いや、粉をオブラートを使ってくるみました。そして有紀のお腕に入れた。警部さんの言っ通りです。私も記憶が曖昧で、必死だったもので、あまり正確なことは何一つ覚えていませんが、確か有紀は、何か近づいた気がするから手で払ってしまったと言っていたと思います。多分そこです。すべては私の犯行です。私は……罰を受ければなりません。いや、罰してください」

ゆっくりだが力強く、鹿島は捲し立てていく。その間、誰も口を挟むことはしない。あれだけ気の経っていた翔子さんですら、自白するその姿を黙ってじっと見つめて

いる。ふと、佐久間さんのことが気になった。交通事故での入院からやっとこき帰ってきたら、担当タレントが殺人を犯していたと知らされることになってしまうのだから。

僕だって、臨時とはいえ、鹿島のマネージャーを任ざれている身だ。管理不行き届きを指摘されたら、どうしようもない。正直なことを言えば、佐久間さんの穴埋めとしてピンチヒッターになって以降、鹿島はずっと物憂げだった。自分はその姿しか知らなかったから、オフではこんなものだろうと決めつけていたが、佐久間さんに話すと、いやもうちょっと元気な子なんですけどねと不思議がっていた。マネージャーの事故に心を痛めているんでしょうと言う話になったが、何か別の理由で悩んでいたのかもしれない。もし、それが凶行に踏み切る動機であったのなら、僕はマネージャーとしてすべき心のケアを怠っていた、ということになるのだろう。

鹿島はそのあと、罰してください、罰してくださいというわ言の様に呟くばかりになってしまった。

時折、藤川警部が誰かが何かを、たとえは

「あなたが犯行に及んだということは分かりました。ですが、動機などは……」

と聞いたとしても、

「……すみません。(ここでは言えません)」

と、力なく返すだけだ。どこだったら言ってくれるのだろう。そう思ったのは僕だけではないはずだ。

そのあとは、空間にただただ、罰して、私が殺したの、罰してください、とすすり泣く声が響くばかりだった。

*

諸々のことがあるらしく、警察も、鹿島も、もうしばらくここに留まるとのことだった。鹿島に反抗の意志がないので、別室に監視を伴って留め置くのみにしているそう。おそらく、目の前で大事なタレントに手錠が繋がれているのを見たくないという社長の意思もあるのだろう。

鹿島はチャシードジュースをひどく熱望しているらしい。飲み物の管理は本来はマネージャーの仕事だったが、佐久間さんが事故でない今は、翔子さんと僕で分担になっている。今僕は社長に呼び出されて、社長に随行させられているから、ジュースをこしらえているのは翔子さんだ。社長は父親・藤川警部のもとに近寄ってこう切り出した。

「藤川警部……いや、父さん」

「ん……、何だい」

「探偵(ごっこ)かい？ 父さんあんまり感心しないよ」

「萩野と柏木ちゃんの荷物検査はしていないから。十分でしょ？ それに」

そこで社長は一度止めると、

「(ここで起きたすべてを知る権利が私はある。そうですよ父さん、私は被害者の雇用主なんだから)」

と、言い放った。

そのあと藤川警部は、警察の邪魔にならないならいいよ、と半ば折れたように娘の言い分を認めると、すぐ何かの電話がかかってどこかに行ってしまった。僕と社長は、犯行現場たる3階から降りて、2階事務フロアにある、社長室にいた。社長はずっと何かを考えているというか、何かを言いたそうというか、そういう顔をしていたから、見かねて話しかける。

「何か気になることでもあるんですか、社長」

「ありまくりだ」

社長の返答は早かった。そして、鹿島の言っていたことを思い返すように、というわけでもなく、ただぼつと、抱いた疑念を口にし始めた。

「考えてもみる。粉にして抽出した毒を持つてゐるなら、どうして葉っぱを持つてくる必要がある」

「そりゃあ偽装でしょう。翔子さんも言ってたじゃないですか」

「偽装だって？ なら葉っぱは全部入れるべきだ。なぜ数枚だけ残さなきゃいけないんだ。まるで私が犯人ですとでも言いたいみたいじゃないか」

「実際に私が犯人ですって言ったじゃないですか」

「いや、そうなんだが。でも犯行があまりにも杜撰だ。少なくとも、鞆に隠しポケットを作った人間の慎重さじゃない」

まあ、その通りだ。僕だって鹿島が自白するまでは鹿島の犯行を信じていなかったから、社長の言いたいことは分かる。けれど、鹿島は強制されるでもなく自白した。どれだけ犯人っぽくなくても、その本人が犯行に及んだと言っているということは、その犯人っぽくなくさを無情にも覆してしまう。犯人だと決めつけているつもりはないが、ついつい反論してしまう。

「でも隠しポケットそのものは杜撰なものでしたよ」

「馬鹿か、萩野。ポケットを作ったのにポケットを使わないのがおかしいって言っているんだ。そんなに不満なら聞いてあげようか、鞆に小瓶のような割れ物を隠そう

として、わざわざ底にポケットを作ろうとするかい？
毒物を入れるような割れたら困るものを、一番力のかかる底面に？」

「それは……」

今僕のことを馬鹿って言いましたか。というか、さっきから社長はこの問答から何を導き出したいのだろう。

「じゃあ社長は何が言いたいんですか。さつきから、何を結論として議論をしているんですか」

社長はそれを聞かれると、待つてましたと言わんばかりの顔をした。そして、これくらい辿り着いてくれ給えよ助手君、と言ってニヤついて、そして言った。

「別に犯人がいる、って言いたいのか」

「もう犯人が自白してるのにはですか」

「そうとも」

「共犯ってことですか」

「多分な。別に犯人がいるのに自分が単独犯のような自白をするなんて、もう一人を庇おうとしているとしか考えられないからね。……ただ、まあ、だとしても不可解なところはあるが……」

と呟いて、社長はスマホを見る。自分も見せてもらおうと、もう冷えてしまったであろう、安達のお椀回りの写真だった。いつの間に撮ったのだろう。四角のテーブルを斜め方向から取ったような写真で、写真中央のあたりを角としてテーブルの二辺が写っている。安達有紀の座っていたのはこの左側の辺で、右寄り、つまり画面中央付近にお椀が写っていて、箸は左端に置かれている。お椀はまだ例の葉っぱが何枚か静かに浮いている。要するに、

さつき見たのと配置は概ね同じだ。

社長が言っていたことは、かなり会社にとってはつらい情報だ。ただでさえマネージャーに欠員が出ていたのに、タレント一人を失い、もう一人が逮捕される。ここからさらにもう一人犯人がいるとなっては、それがマネージャーであってもタレントであっても、到底看過できない大穴が開くらしいことになる。

「別に犯人がいるってのは、確信があるんですよね？」

「あるよ。そいつは犯行のあった後、スタジオから出た人物だ」

「根拠とか、教えてもらえたら……」

「さつきのじゃ不満？」

「うう、もつとそれっぽい話はないんですか」

「詳細はあとで話すよ。それよりも、気にするべきは共犯者が誰か、だ」

「まあ、いいですよ。あとで絶対教えてくださいよ。とりあえず社長は続きをどうぞ」

「ありがとう。……毒が盛られたと思われるタイミングの後、スタジオから出たのは3人。トイレに行った青原楓佳、マネージャーとして自由に入入りしていた赤羽根翔子、そしてお前、荻野颯隆だ。柏木梨々はスタジオを出ていないから、かなり白い」

僕が犯人候補なのは仕方ないとはいえ、ちょっと心外だ、と思った。それが顔に出ていたのか、社長は、

「落ち着き給え。荻野は男。そもそも更衣室に入れないし、男女で場所も違うから男子更衣室に入ると見せかけて、という線はない。お前は犯人から除外だ。そもそもお前が犯人じゃないと分かっているからこの話をしているんだ。自信を持ってくれよ」

よかった。犯人でもないのに疑いをかけられることは当然、いい心地がしない。

「そうなるに残りは2人だが、これはどちらも怪しい。青原楓佳はトリカブトの存在にいち早く気付いたなどトリカブトに詳しいのに、『鹿島の荒唐無稽』に疑問を挟まなかった。赤羽根翔子は鹿島愛に対する風当たりが一貫して強い。不自然なくらいにね」

そこまで言うと、社長は突然社長室から出ようとする。ワトソン荻野くん、さあ、証言集めに出かけようじゃないか。そう言って笑ったがすぐに、不謹慎だったかも、と言って手で口を押さえていた。

証言集めというのは、社長にとってはどうやら証言集めを意味するようだった。

まず証言をさせられたのは、翔子さんでも、青原でもなかった。

「僕ですか！？」

「あたりまえだろ」

「だって犯人じゃないって」

「柏木にだって聞くつもりだよ。それにお前は、今日一番最初からここに来ていた。全員の来た時間を思い出すだけで十分だ」

ええ、覚えているわけじゃないでしょ、そんなの。

「今、覚えているわけないだろ、って思ったな。いいんだよ大まかで」

「は……じゃあ、ええと、確か……」

思い出せ。

僕は鍵を持っていたから、15時半には来ていた。スツッさんたちもそのあとぼつぼつやってきて、最初に

翔子さんと青原が一緒に来た。何か一緒に買い物してきたと言っていたが、それが家庭菜園の話だったようだ。

この直前に16時台最後の天気予報をテレビで見っていたから、たぶんちょうど17時ごろだったと思う。そのあと、17時半がタレント組の集合時間で、安達が10分だけ15分だかくらい遅刻して翔子さんにごっぴどく叱られていた。鹿島柏木は時間内だったことは覚えていますが、それ以外は確かでない。普段の傾向からすると鹿島は15分前には来ていて、柏木は結構ギリギリな気がする。

集合時間の後すぐ今日の予定を確認していた。うん、その時に安達が遅刻してきたんだ。遅刻についてはあまり珍しいことでもない。遅刻に限らず、何かある度に翔子さんに激しく怒られるのも、いつものことだ。

予定確認の後、鬮鍋の具材を提出してもらって、翔子さんと頭を抱えたのを覚えている。

その辺まで話すと、社長は不意にこんなことを聞いてきた。

「そういえば、リハーサルは？ 確認作業の類はしていたらどう？」

「それが企画説明で教えたはずだったことだった。社長……責任者なんだから覚えていてください。前日にやる予定だった企画段階で言っていたでしょう」

「そうだったな。で、やったのか？」

「大したことは。設備と軽い流れの確認だけだったと思います。鬮鍋である以上、具材が集まらないとなにも動けませんから。僕も参加してませんでしたし。少なくとも翔子さんはいたはずですね」

ふうん、と興味なきげな返事。なんで聞いたんだよ。

「はなしを今日に戻そう。荻野、さつきは確か……鬮鍋の具材を提出したとこまでだったな。それ、具体的にはいつ頃だった？」

「確認してないですね」

「使えないな荻野。何でもいい、それより後で時間を確認したのはいつだ」

「ああ、それなら、18時半よりは前です。本番30分前になって、雑談とかしてたみんなに声をかけていたよりは前ですから」

「その時はみんなにおかしな点は？」

「……あっ。鹿島はチャアシードを要求してきました。何杯目か、って聞いたら、1杯目ですよって笑ってましたけど、確実にかわりでしたね。その15分くらい後におかわりを要求してきたので、流石に止めましたが。もう会場入りの時間で、最後の一杯のつもりだったと思います。そのまま、更衣室にふうふう入って行きました。まあ、すぐスタジオ行きましたが」

「それはなんにおかしな点じゃない。食いすぎなのはいつものことだろ。ほんと、中毒だな」

「そうですね。本人に言うとは絶対否定してききましたけど、僕がそう苦笑気味に返すと、社長は急に目を伏せて、

「……もう、その姿を見ることは叶わないな」

そういった。一瞬、それが孕む悲しきに思いが飛んで、何も言い返せなかったが、すぐ社長は、チャアシード、誰かが消費しなきゃいけないなあ、と茶を濁した。でも、普段はもっと笑い飛ばせる茶化しをするのに、これはそれと違い、隠しきれない弱気を確かに感じて、

「……そうですね」

そう言い返すことしかできなかった。

*

そのすぐ後に社長は、たぶん責任者かになかとしてだろう、警察の居る方へ呼ばれてしまい、要するに残る人々に話を聞く役目は僕へと押し付けられたのだった。

「あとは任せた。いいか、あくまでも聞くのは社長に嫌々、という感触でやれ。受動的にやれ。共犯者ならがつつく。ほろを出す。例えば、こういうことを言うんだ。『鹿島が捕まったのに聞き込みなんて、共犯者がいるみたいですね』って。共犯者なんかいない、鹿島の単独犯だと思わせたい人がいる」

社長の言葉が、重く刺さる。

社長は、本気で共犯者がいると考えていた。

あとは任せた、と言われても自分に口くなことではできない気がしない。自分にはなんとなく話を振って情報かどうかもわからない何かを集めるのが関の山だ。そもそも探偵じゃないんだから話の振りかたもわからない。そういう意味では、話を聞かなければならないのがマネージャー仲間の翔子さんと担当ライバーの青原でよかったと言えるだろう。

順番がどうと言う話でもないのだから先に見かけた方から先に話をしようと思っていたのだが、先に見かけたのは翔子さんだった。企画自体の責任者は彼女だから聞き取りでも受けていたのかも知れない。そこに更なる聞き込みをかけるのは酷なような気もしたので、話すのはそこそこのまにしようと思った。

「翔子さん」

「あ、萩野君。社長は？」

「翔子さんの次の聞き込まれだつて」

「そうなのね、じゃあお守りはしばらく解放？」

「や、それが……」

かくかくしかじかで、と、嫌なことを任されたことを愚痴るように話を切り出し始める。

「なるほど。社長はやっぱ萩野君使いが荒いのね」

「翔子さんから何か言つてやつてくださいよ」

「無理☆」

「そんなあ」

僕が露骨に肩を落とすと、気を使つてくれたのか、こう提案してくれた。優しい。

「……でもまあ、社長に頼まれた以上やらないわけにはいかないでしょ？ 協力するから、なんでも聞いて」

「ありがたい。ええと……」

「本番までの流れでいい？」

「助かるよ」

翔子さんは僕の返事を受けて、ええとまずはね、と前置きして、今日を振り返り始めた。

「喫茶店で楓佳さんと落ち合つて園芸店でいろいろ物色したところからかな。これは私が誘つたの。そのあとスタジオだったから苗にもう植わつてるのとかは見るだけだったけど、種は二人とも」

そして付け足すように、知ってるかな、ミニトマトは育てるのが難しいのよ、と言つてドヤ顔をした。僕が流すと、社長のお陰であしらいスキルが身に付いたのね、と笑つて、もとの話に戻る。

「事務所についたのは17時ちようどで、そのつぎに来

たのが鹿島。でも、更衣室に入ったきり全然出てこなくて。それが不思議だつたかな」

——おや。それは確かに変だ。そして更に、それだけでない、別の違和感も僕を襲つた、気がした。

「そのあと柏木ちゃんが来て、二人揃つて集合時間ギリギリに更衣室から出てきたかな。で、有紀が当然のように遅刻」

「めっちゃ怒つてましたもんね」

「ほんと。弛んでたのよね、有紀。柏木ちゃんを見習つてほしかったわ。柏木ちゃんは活動初期から私が持つてるけど、きちんと頑張つて今や社長を追い落とす勢いになった。だから有紀にも出来ないはずはない。素質はあるのにピシツとしないから今一つのままだつたの。でも……ピシツとしてもらう前に死んじゃつた」

「……」

「……………」

人が死んだ。

その事実を、やはり僕は受け止め切れていない。静かな空気が僕を包む前に、翔子さんは言う。

「ねえ萩野君？ 鹿島、どうして殺したのかしらね」

「さあ……」

「社長は何か？」

「特には。でも社長ならこういいますね、『動機など参考にはかならん。動機がなからうと犯行可能なものは容疑者だ』つて」

「あー、言いそう」

談笑。人の死を追憶したたつた数刻で、僕は笑つた。人間は悲しみを乗り越えることが出来る。

人間は悲しみを覆い隠すことが出来る。

人間は悲しみを踏み躪ることも、出来る。

「……翔子さんごめん、話題が逸れた」

「あつ、ごめんごめん。どこまで話したっけ？ 有紀の遅刻か。でも集合時間のあとの確認と具材確認は萩野君と一緒にやつたから一緒だと思う」

「そうですね」

「具材はそういえば、萩野君は事前にどこまで把握してたの？ 私は実は梨々ちゃんと有紀からそれぞれ半分だけは聞いてたの。キャベツと豆乳、山菜と湯葉だけね。それ以外はお楽しみだつたけど、まさかチョコにポテチなんてさ」

「ああ、僕は全く任せてましたね。鹿島からは変なものはない確信がありましたし、青原からもブランドーを持ち込んでよいかと言われて止めた以外は」

「止めて正解ね。……で、鍋そのものの下準備は放送スタッフに奉行がいてやつてくれたから、時間が空いたのよね。その時のみんなの様子で気になったことを言えば良いのかな？」

「話が早いです翔子さん、お願いします」

「うーん。でも、みんな緊張してたのと、鹿島が特にいっつになく緊張していたのを覗けば、私は気になるところはなかったかな。トイレや更衣室には何人か行つてたけど、本番の前にスタジオに入ったのはスタッフさんだけで私も含めて放送の時にスタジオにいた人はいなかったはず。本番中は私は萩野君とずっといたもんね」

「そうですか……」

「ごめんね……。逆に萩野君はどうなの？」

突然に話を振られて、僕は一瞬混乱した。僕か。僕が本番前に、いや、いつでもいい。いつもと違うな、と感じ

たごころは……

「青原」
「楓佳ちゃん？」

「そう。今日ずっと眠そうでしたよね。園芸屋さんで気付きませんでした？」

「うーん。私は普段彼女と関わらないから。もしかしたら、マネージャーとして普段から見てるから気付いたのかもよ」

「そうかもしれないですね。じゃあ、安達と柏木は？」

「いつも通りよ。何も変わったところなんてなかった。

この私が言うのだから間違いないわ」

「そうか……」

あまりいい情報は得られなさそうだなてんと、話を切り上げようとすると、思い出したように翔子さんは声を出した。

「ああ、ごめん、忘れてた。不自然な人」

「おおっ、誰ですー？」

「あなたよ」

「へっ？」

僕ー？

「……というか、正確には社長ね」

「社長、ですか」

「そう、社長。取り乱してるでしょ？ いつもなら不気味なくらい冷静なのに」

「まあ、そうですけど」

まあ、確かにそうだ社長が冷静でないのも珍しい。でも殺人事件があったのだから仕方ないと思うのだけ。そ

う考えていると、翔子さんはそれに、と言って、付け足した。その言葉は、社長の警告通りで、僕の心臓が止まるかと思った。

「鹿島が捕まったのに聞き込みさせるなんて、まるで共犯者がいるとも言いたげじゃん。信用されてないのかな」

*
まさか。社長の警告通りなら、共犯者の話を自分から出した翔子さんは怪しいということになる。

「……まあ、社長に振り回されてるというわけですね」

「そうだよ……まあ、付き合ってくれ」

「やだマネージャーったら、付き合ってるなんて……」

「求めてない」

というわけで(どういうわけだか)、僕は自分のマネージャーとしての担当タレント、青原楓佳に聞き込みをすることとなった。

「私は赤羽根マネと一緒に園芸屋に行ってから来たからいつもよりもやや早く来たわね。いつもギリギリだから新鮮だわ」

「まあ、僕のほうが早かったけど」

「鍵持ちなんだから当然でしょ。梨々ちゃんと愛ちゃんも一緒だったのかしら、集合時間の半過ぎに同時に更衣室から出てきたから」

「そのあとは？」

「うーん。6時過ぎだったかな、マネージャーに具材渡したあと、てとら〜くの皆でおしゃべりした」

ああ、それでそこから抜けてチアシード持ってきたのが18時半に遭遇した鹿島だったのか、と、自分で納得する。その時の皆の様子、特に鹿島に、変なところがなかったか聞く。

「愛ちゃんは、そう……ね。いつになく緊張してたように感じた、かも。今思えば、だけどね。だって、マネー

ジャー愛ちゃんに今から飲むみたいなこと言われてチャ
シード作らされてたんでしょ？ あれ、4杯目」

「4杯目えー？」

いくらなんでも多すぎだ。精神安定剤にでもしてたの
か。普段なら自分から2杯にとどめていたはずだ。

「あいつほんと……」

「私達も止めようかと思っただけで、ほら、なんか怖
くて。鬼気迫る表情で飲んでたから。梨々ちゃんもそっ
としてあげた方がいいって言うし」

だからって……。とにかく、緊張しまくっていたのだろ
う。人を殺すのを心に決めていたとしたら、ある程度の
説明はつく形だ。それはそれとして、他の人の変なこ
ろや、その後の動きを聞いていく。

「すっかり探偵らしいわよ、マネージャー。……もうそ
の時点で本番30分前だし、スタジオ入りも40分から
だったから、もうみんな緊張は多かれ少なかれしてたか
な。トイレに立ったり、意味もなく更衣室に行ったり。

半より前だけと赤羽根マネも更衣室に入ってたかな。こ
の企画には力入れてみたいだからね」

そう言っただけこんなところかなあ、と話を切る。でも
僕はまだ聞かなければいけないことがあった。明確に変
な様子のあった人のことを聞く。

「待って、まだ変な動きをした人がいたでしょ」

「ええ？」

「青原さん、君自身。ずっと眠かったでしょ、今日」

「あら、隠せてない？ 私は確かに昨日寝てないの。何
故かというと、……梨々ちゃんがね。珍しく梨々ちゃん

から電話があつて」

「柏木が？ 言われてみれば変なところもあつたか……？」

「柏木も変だったのか」

「うん。彼女も多分何か思い詰めていたんでしょね」

「なんだよ、思い詰めた人間多すぎないか」

「失礼よ、マネージャー。とにかく梨々ちゃんは、昨晚
電話をかけてきたの。けっこう泣く寸前というか、感極
まる所があつたのかもしれないわ。最後まで詳細を言っ
ことはなかつたものの、概ねこういうことを言っていた
と思うわ。『大変な状況下にあつて、しかも好転する気
がしない』」

不思議な言い方だ。大変な状況下にあつて、しかも好
転する気がしない……。なにかのトラブルに巻き込まれて
いたのかもしれない。そうすると、青原は続けて、

「それと。何よりも、たぶん本番のすぐ前、梨々ちゃん
が愛ちゃんに、こう言つてたのを聞いてちゃつたの」

「柏木が？ なんて？」

「……うん。驚かないで、マネージャー」

そう言われて、思わず身構えたが、来たのは想像以上の
もので。

「こう言つたの。」

『ね、ねえ鹿島さん。やっぱりやめよう？ 怖いよ』

——それは。

「そ、それは、示唆的だね」

「ええ。少なくとも、何か知つてると見て間違いないわ」

「……ちなみに、他にそれを聞いてた人はいる？」

「うーん。赤羽根マネとか見てもおかしくない気がす
るけど。赤羽根マネは何か？」

「聞いてない、かな……」

「柏木の担当マネージャーは翔子さんだ。そしてその翔子
さんが、彼女を含め、変なところはないと言つていたの
だから、少し気になる。まあ、常に目を離さないでいる
わけではないだろうが。」

そこからは、大した情報を得ることはできなかつた。

どうせとんでもないモノを食わされると身構えていたか
ら、それで手一杯だったらしく、本番は誰がいつもと
違つたかそういう類のものはまったく分からないらしい。
そうなる自分と自分と出来ることはなく、たんにマネージャ
ーとアイドルの会話が始まるだけだった。

それがしばらく続いて、話題が切れかかつた。何か他
に話すようなことはないかなと思つたのだが、その間隙
をついて、青原はこんなことを言い出した。

「あのさ、マネージャー。社長はなんでマネージャーに
聞き込みさせてるか分かる？」

「え？」

「それはね、社長に私は疑われてるのよ。共犯者として」

「えー？」

驚いた。共犯者の話がこの人からも、完全に僕が導く
でもなく青原の口から出てしまったからだ。とりあえず
白を切ることにする。

「な、なんで？ 共犯者なの？」

「考えてもみてよ、マネージャー。愛ちゃんの証言には
無理があるのよ。アコニチンを包んだオブラートを持つ
て隠すのは自殺行為だもの。気付いてた？」

なるほどと思う。しつかり包んだとしても、ポケット

の中にぶちまけられてしまう可能性があるのか。それが、社長の言っていた『鹿島の荒唐無稽』なのかもしれない。

「だから社長はきつと、誰かを庇ってるって思ってるんじゃないかな」

「そう、だったのか。……ねえ、まさか違うよね？」

「心配しないで。共犯者がいるとして、少なくとも私じやないもの。それに、別に単独犯でも、毒ポツケに手を入れる理由はちゃんとあるもの」

「え、それは……」

青原は申し訳ないとも言いたげに一瞬目を伏せて、そして重々しくこう言ったのだ。

「最初から自分も共に死ぬつもりなら、別なのよ……」

その時だった。

バン。

その音はドアを勢いよく開ける音だった。

「荻野、青原。大変だ。鹿島愛が倒れた」

*

鹿島は息をせえせえと言わせながら、苦悶の表情で地面に倒れていた。救護関係者がすぐに来て、病院に送る。

社長への聞き込みは比較的早く済んだようで、観察下にあつた鹿島と会話を試みていたところ、息が荒く異常な発汗をしているのに気付いたという。社長は面会の間ずっと別の警官さんが立会っていて、鹿島に何か手を下した様子はなかったという。

……まあ、鹿島に何が起きたかは明らかだった。隔離されていた時、彼女はずっとチアシードジュースしか飲んでおらず、そして彼女のポケットからは、茎の先端が脱色されたような白味を保ち、葉っぱの先っぽ側半分がかじられてしまっている植物の入った半透明の袋があつたからだ。この半透明の袋が、鹿島の鞆のものと同じであれば、中に入っているのも当然トリカブトの葉であつて、彼女は隙を見てそれを口に入れ、自殺を試みたということになる。

僕がそう考えたわけではない。その結論は誰の目にも明らかだった。安達の時と違いとくに聞き込みもない。そもそもチアシードジュースを貰つてから社長が面会するまで、鹿島は全く外界との接触はなかったからだ。

社長は二階の社長室で、けたたましい救急車のサイレンがだんだんと離れていくのを窓辺で聞きながら、やりきれない表情を隠さず、しかし社長たる自分はしっかりとしななければならないんだ、と自分を鼓舞するかのようになつて、僕にこう言った。

「これじゃあ、彼女からの聴取はもう出来そうにないな。」

まあ、仕方ない。今できることをやろう。荻野、聞き込みの首尾はどうだった」

僕は聞き込みの内容をそっくり話した。

「成程ね。いくつか面白い点がある。まず、赤羽根翔子と青原楓佳で証言の食い違いがある。一番の大きな違いは、柏木梨々の様子についてだ。担当である赤羽根翔子は『異常なし』、青原楓佳はその逆。どちらが正しいか？ それは今はまだ関係ない。問題は青原楓佳の証言した、収録前何かの中止を鹿島に迫ったという話だ」

「そうですね。何か、とは何でしょう」

「短絡的に考えればもちろん安達有紀の殺害だろう。だが、これは考えにくい。さっき言ったように、柏木梨々が共犯者の線は無いからだ。少なくとも毒の運搬を担当した共犯者ではない。その上で柏木梨々を第二の共犯者だとすると、不自然がある」

何だか分かる？とでも言いたげに、社長は話すのをここで一旦やめて僕を見る。これは僕も見当がついていた。

「柏木は、共犯者として何をしたんでしょうか」

「正解。それが全く分からない。役割が薄すぎるんだ。だから、柏木梨々はまず共犯者ではない。共犯者はやはり青原楓佳が赤羽根翔子なんだ。……そういうえば、共犯者は鹿島愛を裏切ってること、わかる？」

「裏切ってる？」

「そうとも。鹿島愛の鞆のあんな分かりやすいところに犯行の証拠を置いたんだ。本来どこかに安全に捨てること示し合わせていたものが自分の鞆にあつたら、鹿島愛の驚愕の表情にも説明がつく。鹿島愛は共犯者に裏切られているんだ」

「えっ、でも、庇ったんですよね、その共犯者を」
「そう、問題はそこだ。その謎を知りたくて鹿島愛に面会したんだが、その時点で眩暈がするとうわ言を言っていてね。で、異常に気付いた……」

共犯者の存在。

裏切った共犯者。

裏切ったのに庇う鹿島。

柏木の言動。

分からないことが多い。

そうして僕もがうんうんと唸っていると、コンコン、と社長室の扉を叩く音がある。どうぞ、と社長が応答すると、扉が開いて、そこに現れたのは、

「ん、柏木か。どうしたんだい」

「あの、マネージャーにも楓佳さんにも、副社長が話を聞いていたとのことだったので、次はわたしと思って」

「ああ成程。どうしようかな……」

僕と社長の目が合う。柏木の謎は気にはなるが、でも柏木は共犯者ではない。聞き込みは社長が気分で行っている以上、柏木に対して強制はできない。だから僕は、彼女には自分から聞かないつもりだったから、こう言った。

「無理にとは言わないよ。警察の取り調べじゃない。社長の道楽に過ぎないんだから」

だが、彼女は返す。意志のこもった返答だった。

「いつ、いや！ 実は、話を聞かれないんです。聞いて欲しいことが……絶対に、お耳に入れなければいけないことが、あ、あるんです……。もしかしたら、私がこれ

をもっと早く伝えていれば、何も起こらなかったんじゃないか。そう思えるほどのです。わ、わたし、どうしたら」

それを聞いて、僕と社長はもう一度目を合わせる。今度ははっきりとした意志、これは何かある、という意思疎通だ。

「……成程。聞くよ。そこにかけて。ゆっくりでいいよ」

じ、じゃあ……と言って彼女はふかふかの椅子に座ったが、縮こまってジット下を見て、話そうとしない。話す勇気がない様子だ。もちろん、だからといって僕も社長もせかさうようなことはしない。柏木の引つ込み思案はよくわかってる。

しばらくの間彼女は、あの、ええと、といった声を何度か出したが、その後が続かない。それでも、少しだけ大きく息を吸って吐くと、意を決したようにこう言った。

「あ、愛さんは、あの毒を自分自身に使おうとしていたんです」

開口一番、とんでもない言葉が出てきた。

「配信の時点で自殺を試みていた、と？ 何故」

至極当然の疑問が、社長の口を突いて出る。鹿島が自殺したのは、安達を殺した自責の念からではなく、最初からそうしたかったのだろうか。

「……助けようとしたんです。有紀さんを。そっそれで失敗したんです」

ああ、そういうことか。それで失敗を悔いて、トリカブトで死のうとしたのか。

だが、逆に分からないことが増えた。

「助けようとした、ということは、安達有紀は助けられねばならない状況にあった、ということだ。その状況とは？ 彼女は何の危機に瀕していたんだ」

そう、それだ。それは純粹に気になる。しかし、柏木の口を出したのは――

「い、言えません。それは」

――え？

「言えない？」

「……ごめんなきい、おかしいですよ。でもそれだけは、それだけはわたしの口からは言えないんです」

「どうしてもか」

「っ……はい。どうしてもです」

そんな。それはない。思わせぶりなことを言うだけ言ってこれ以上はなんて、虫がいいだろう。そんな風にならずに満を言おうとしたのを察したのか、社長は僕が言おうとしたのにかぶせる形で、

「やめる荻野。話が聞けるだけ十分だ。……柏木、言いたくない、というのによく分かった。つまり君は、こ

いたいんだな、『鹿島愛は自らの命を犠牲にしても助けたい』と思えるほど、安達有紀は危機にあった。だが自身を蝕むはずの毒はあろうことか救うべき彼女を襲い、

安達有紀は死んでしまった。彼女は罪の意識と後悔に苛まれ、罰を望んで、遂に「最初から自殺に使うつもりで隠し持っていた毒を服し、償うことにした』……と」

「そ、そうです。わたしが本番前、もっと強く止めていれば良かったんです。いや、相談された時点で止めておけば。そうすれば、こんなことには。愛さんも有紀さんも死ぬことはなかったんです。社長。わたしも悪いんです。しばらく活動はできないでしょうが、もし再起動しても、私はきつと笑顔で配信できません」

最初弱気だった彼女の口調は、だんだんと強くなっていった。目には涙。だが、決して言葉を詰まらせることは無く。これが隠れた芯の強さ、とどろくで一番の登録者数を持つ者の責任感なのかもしれない、と思った。社長は、全てを言い切つて息を細切れに吸いながら泣く彼女に近付いて、頭を撫でて包むように言った。

「ありがとう、柏木。君が勇気を出したから、私は鹿島愛が悪意で人を殺そうとした悪い奴だという誤解を解くことが出来た。言えないことがあるのも、きつと君の責任感だと思う。みんな、大切な仲間が死んで戸惑っている。そんな中で、君の行動は本当に勇気があった。でも、無理しなくていい。今は活動再開のことを考えず、失った大切な仲間を想いを馳せるんだ……」

*

「きて——」

社長の慰めで泣くのを堪え切れなかった柏木が、ようやく心を落ち着けて帰っていくのにはしばらく時間がかった。社長は三階まで彼女を送って戻ってきた。

「——どう思う」

それが社長の第一声だった。もちろん、柏木の証言のことだろう。

「嘘はついていないと思います、が……」

「まあ、本当だろうね。演技とは思えない」

「でも社長、だとすると……」

「そう。余計に分からないことが増えた。そう——」

僕と社長は声を合わせて、

「共犯者」

社長はうんうんとにこやかにうなづいて、僕がちゃんと頭を回していたことに喜ぶ。失礼な。

「よくわかってるじゃないか、荻野。だが、それ以上の謎もある」

「何です？」

「どうして失敗したのか、だ」

「……ああ、確かに」

「そうだろう。自殺ならそもそも安達有紀の皿に毒が入ってしまう理由がない」

「その役目を果たしたのが、もしかして共犯者なんじゃ」
「……と言いたいところだが、それだと不自然だ。共犯

者の裏切りが毒を安達有紀にもたらし、その罪を鹿島愛に全てかぶせることだったとしたら、鹿島愛がそんな裏切者を守る理由がない。命を捨てて守るはずだった人間を殺されているのに、庇っている。ここが大きな謎だ」

確かにそうだ。どういうことだろう。

「考えられるのはいくつかある。一番簡単なのは柏木梨々の証言が間違っていることだ。嘘をついているか、事実誤認をしているかは分からないけど。もうひとつ考えられるのは、安達有紀の死は本当に事故で、共犯者が怖くなって鹿島愛に罪をかぶせた可能性」

「……でも、どっちもおかしくないですか？ 柏木は共犯者ではないから嘘をついているとは思えないし、間違いがあつたとしても自殺すると相談をうけていたという認識自体は流石に大きく外してはいないはず。そして、安達の死が本当に事故だとしても、裏切られてなお庇う理由にはならない」

「そうだ。だから大きな謎なんだ。いったいどうして裏切られたのに庇った？ そもそも危機の安達有紀を救う手段が自殺つてどういふことだ、自分が死ぬことで何が起る……？」

難しいですね、と僕がつぶやいたが、社長は黙つたままだった。

そういえば、彼女が思い詰めていたのは最近だったと思いきす。

「社長」

「なに」

「いや、関係ないかもしれないんですけど。鹿島が落ち込んで元気がなかったのって、佐久間が事故つてからなんですよ、多分。僕が代理で鹿島を担当した時には何か物憂げだったんですけど、佐久間はもっととはつらつな

子だったって言うんです。佐久間が離脱したのを気にかけているんだろうと思っただけで何も言わなかったんですが、これが思い詰めたのの正体なんじゃないかって、今思ってます」

何か言い訳がましいような言い方になってしまった。

実際、言い訳がましい。なんでもっと早く言わなかったと言われても文句は言えない。けれど社長は何も言っていない。恐る恐る社長のほうを見ると、

「……！」

社長はこちらを見て、目を大きく開けて、何かつぶやき始めた。社長大丈夫ですか、と言おうとして止めた。僕はこれ以上社長の足を引く張るべきではない。社長はうわ言を言うように、目は開けたまま、しかし視線は僕から外して所在なく下へ向かう。

「佐久間啓一の離脱……赤羽根翔子と荻野颯隆の緊急登板……証言の食い違い……安達有紀の危機……今鹿島が死ぬば……ああっ！ そうか、だから自殺を柏木梨々に相談したんだ！」

僕に今出来るのは黙ることだけだ。社長は推理を終わらせてかけている。

「つまり……裏切りは解決……あとは方法だが……彼女の葉は恐らく……でもだとしたら……いや待て、眩暈と発汗？ ……眩暈と発汗！ トリカブトにそんな症状はない！ じゃあ、毒の正体は……！」

少しの沈黙。いつの間にか、社長は大きく見開いていたはずの眼が閉ざされていた。やり手の女社長らしいというか、黙ってれば美人というか、そういう顔立ち。まあ、この顔の口から発せられるのは、副社長たる僕をこき使う声のだけだ。

社長はその目をゆくりと開き、僕の方を見る。

「……成程ね。すべて分かった」

「本当ですかー？」

「ああ。……犯人は二人だと思い込んでいた、それ自体が決定的な誤りだったんだよ」

そう言っ、二階に行くぞ、と準備を整え始めた。探偵の時間が、始まる。

*
エレベーターで三階に戻ると、ちょうど藤川警部が数人の部下とともにエレベーターを待っているところだった。

「ん、和花、ちょうどいいところに。もう引き上げるころになったが、社長に伝えなきゃと思って下に行くつもりでね」

「待って父さん。帰る前に、聞いてほしいことがある」

「……今必要なことかい」

「……今しかチャンスのないこと」

社長がそう言うのと父娘は少しの間だけ無言で視線を交錯しあう。だが、娘の何かを確信したような表情の前に、父はどうやら興味が湧いたらしく、聞こうじゃないか、と言っ、エレベーターに背を向けた。

藤川警部を見送ったばかりだったのか、スタジオ外の大きな空間には翔子さんと青原柏木、そして何人かのスタッフが既にそろっていた。そこに藤川警部と僕と社長が戻ってきた形になる。

「さて、お誂え向きにも全責いるね。いやすまない。社長として、この場を少しお借りするよ。鹿島愛を牢獄送りにするにあたって、気になることがあってね。そうしたら、一つ気付いたことがあるんだ」

社長は何だかいかにも探偵らしい、どこかもったいを付けた言い方で語り始めた。

「鹿島愛は自前でトリカブトを用意し、そしてこの闇鍋企画に乗じて寝ノ神こもり——安達有紀を殺害した。だがバッグからあつかりとトリカブトの葉が発見されたことで彼女の仕業であることは簡単に露見し、自白。警察署に連行されようとしていたが、隙を見て隠し持っていた一枚のトリカブトを取り、チアシードのジュースで流し込む形で自殺を図った。——そうだね？」

社長は「ここあたりを見回した。誰も意義を唱えるものがないことを確認して続ける。」

「うん。彼女のバッグも証言も、鹿島愛が犯人であることを示している。彼女の自宅からは葉っぱの千切られたトリカブトの鉢が見つかるだろう。彼女は実際に使うつもりで有毒植物をこのビルに持ち込んだ。」

でもね。彼女が法によって裁かれるとしたら、それはおかしいんだ。だって愛君が殺せるはずがないんだ。父さん……いや警部さん、鹿島愛のバッグから出てきたトリカブトの葉っぱをください。」

と言うと、すぐに社長に貴重な証拠品が手渡された。社長は葉っぱを一枚、ポケットに入っていた半透明の小袋から取り出した。

そして、それを皆に見せるように茎を持ったその手を掲げると、口を大きく開けて、葉を口に近づけた。

「和花ー？」

「社長ー？」

そうして、まるで甘味でも食べるかのように、もったいぶりながら、ゆっくりと口に入れ、大袈裟に咀嚼するような口の動かし方をして、飲み込んでしまった。

そうして、あつげにとられる周囲を気にもせず、何事

もなかったかのように、まるで社長は授業でも始めるように、つらつらと語りだす。

「……ここで、鹿島愛の供述を思い出しつつ、犯行を再構成してみよう。事務所に来て、更衣室で道具一式を取り出す。毒殺の粉は瓶から取り出してオブラートで包み、ポケットに隠し持っていた。それで来るべき時を待ち、毒殺の粉を闇に紛れて混入させた。偽装の為、粉だけじゃなくて葉っぱそのものも入れた……こうだよね」

「僕も概ね同じだと思います」

僕はその言葉に社長はうんうんとうなづいて続ける。

「……おかしくはないか？ 愛君が本当に有紀君を殺せうとするなら、必要なのは粉とニンソウだけだ。ニンソウをトリカブトと間違えて盛ったという筋書きが欲しいとしても、粉の毒がある以上、トリカブトの葉っぱそれ自体は必要ではないよね。なぜ粉の毒とトリカブトの葉を両方入れなければならない？ これが疑問そのいちだ」

僕達が、確かにと言った感情を浮かべつつ次の言葉を待っていると、疑問その二に、と言って、また語りだした。

「毒の混入方法も疑問だ。量はオブラートの大きさから約3グラムと推定しようか。この粉が純度100%のアコニチンだったとしたら、どう少なく見積もっても数百人は葬れる量だぞ。実際にはそこまで純度が高くないにしても、トリカブトは猛毒だ。ただの紙べら一枚で包んだだけのものをポケットに隠すのは、リスクが高すぎる。下手をすれば死体がもうひとつ転がることになるからね。オブラートは不必要だ。瓶を持っていたのだから、それ

を使えばいい。鹿島愛は瓶を持ってスタジオに行き、闇にまぎれて瓶の粉を安達有紀のお椀に注いだ。合理的な説明がとれるのはそれだけだ」

まるで演説みたいに、随分と力が入ってしまった。この状態の社長を制止するのは困難だろう。

「つまり、瓶から直接入れたんだ。犯行時、瓶はバッグにあったのではなく、あのスタジオの中にあつたんだ。それがバッグにあつたということは、瓶を外に持ち出したことになる。だけど、鹿島愛はスタジオから一步も出ていない。ってことは、共犯者がいる。少なくとも、鹿島単独ではこの犯行は実行できない」

共犯者がいるという情報に、皆が不信とともに互いを見合う。そんなことを気にも留めず、社長は新しい話題を提供する。

「鹿島が実行犯でないことを支持する情報がある。この写真だ」

社長はいつか自分に見せた写真を皆に見せた。

それは現場の写真だった。四角のテーブルを斜め方向から撮ったような写真で、写真中央のあたりを角としてテーブルの二辺が写っている。安達有紀の座っていたのはこの左側の辺で、右寄り、つまり画面中央付近にお椀が写っていて、箸は左端に置かれている。お椀はまだ例の葉っぱが何枚か静かに浮いている。シエリー・寝ノ神・深山・秋宮の順で反時計回りだったから、位置関係から考えれば、左側の辺に座っていたのが安達なら、右側の辺は鹿島だ。

「鹿島愛の席が右で、安達有紀は左。だが、気付かないかね、安達有紀は右側にお椀を、左側に箸を置いた。つ

まり安達は左利きだ。これの意味が分かる？」

「……あつー！」

藤川警部が何かに気付いた。

「鹿島さんは、自白に際して、『確か有紀は、何かが近づいた気がするから手で払ってしまったと言っていたと思います。』と言っていた。しかし、安達さんは左利き、つまり箸を左で持っていたから、手で払うのは多くの場合左側、鹿島さんの側じゃないのか」

「正解、父さん。もちろん右側まで手を出張させた可能性もあるし、これが示唆するのは『安達有紀が手で何かを払った瞬間は、鹿島愛は毒を入れていない』ということとだけだ。だが、安達有紀の自白時の証言が嘘である可能性がある、という参考にはなる」

そういうと、社長はこれまでの推理を総括した。

「鹿島愛とは別に、安達有紀の殺害に協力していた人物がいる。そいつが毒を盛る段階でどの程度関わっていたか、それはこれから明らかにするが、瓶などの犯行用具を鹿島愛から回収しスタジオから持ち出す役割を担っていたということとは明らかだ。だが、スタジオから回収してどこかに処理するはずだったであろう用具を、共犯者は鹿島愛の鞆に入れた。共犯者の裏切りが発生したことになる。では、共犯者とは誰か？ 何故鹿島愛は裏切られたのに自白ですべての罪を背負い込んだ？」

そこまで言うと、社長は僕らを睥睨する。誰も何か持論を差し込もうとする人はいない。

「で、それについての答えを、遠回りしながら提示したいと思う。共犯者はさっき言ったとおり、犯行後に小瓶を回収し、更衣室の鹿島愛の鞆に入れた人物だ。つまり、

犯行よりも後にスタジオを出ている人物になる。該当者は3人。警察が来るまでの間にトイレに立った青原楓佳と、マネージャーとして何度かスタジオ外に出た赤羽根翔子と荻野興隆。赤羽根は配信中に安達を伴って外に出るね。この3人。だが、荻野は男。女子更衣室には入れない。共犯者候補は事実上君たち2人のどちらかだ」

「そんなー！」

淡々とした物言いを続ける社長に、共犯者候補と言われた2人は文句を言う。が、それで社長が止まるはずもなかった。

「さっき私は、鹿島愛の持っていた葉っぱを食べた。……で、私は死んだかい？ もう5分は経ったな。……まあ、厚労省によれば摂取後10〜20分あたりでの発症が多いらしいから、まだ発症してないだけかもしれない。

1枚だけだから量も少ないし……。まあ、そろそろ呂律が回りにくくなってもいい頃だけど、まだ初期症状は出ていない……。いや、出ない、と断言して、そして問い直そう。鹿島愛が人目を盗んで食べたのは、本当にトリカブトだったんだろうか？ いや、トリカブトなんかじゃない。鹿島愛が毒だと確信して飲んだのは、ただのニンソウなんだ」

衝撃が走る。だとしたら、いろいろとおかしいじゃないか。それでも社長は止まらなかった。

「トリカブトは北半球の温帯なら高地に行けばどこにでも生えている。ニンソウも同じで、混生することすらある。そして葉の形は種にもよるが似ていると言っている。ニンソウはおいしい山菜だから、ニンソウだと思込んでトリカブトを食べて死ぬケースは頻発してい

る……。悲しいことに。さて、そんなトリカブトとニンソウの区別だけど、難しいから本来はそもそも食べない方がいい。ただ、今回私がこれをニンソウだと確信したのは理由がある。本州、それも関東で見られるのはまぐずヤマトリカブトかツクバトリカブト。この2種はどちらも互生という葉の付き方をする。茎から左右へ互い違いに葉が出るからそう言うんだ。一方で、ニンソウというのは地面付近からまとまって葉が生える根生だ。鍋に浮かんだいくつもの葉は、葉柄の先端が白くなっている。白いつてことは葉緑素がない。太陽光が当たらないから、葉緑素がいらぬ。植物の根元付近でしか見られない特徴だ。つまりこの草は根生、ニンソウの可能性が高かった。あとは葉柄の断面が中空であることを確かめて終わり。トリカブトなら中実だからね。……つまり、愛君は毒でも何でもない無害な山菜を毒だと勘違いしていたに過ぎない」

僕は情報の津波に負けないようにしながら、必死に頭の中で社長の言葉を反芻する。それで、社長のニンソウ説が正しいなら、いくつもの不具合が出ることに思いつく。それを察したか、社長は僕に話を振る。

「そうすると、いくつか問題が発生することになる。荻野、わかるね」

「もちろんです。一つ目は、無害な山菜を飲んだはずなのに倒れて搬送されたという点。そして結局、トリカブトの葉っぱが存在することを説明できません」

「そう。これで分かるのはあくまでも、『鹿島愛は捕まった後、ニンソウを食べて自殺を図った』ことだけだ。実際には犯行に関連したすべての葉っぱがニンソウだったわけじゃない。トリカブトはしっかり存在する」

社長は柏木の方を振り向いて話を続ける。

「ここで、柏木梨々からの情報提供。彼女は事件後スタジオから出ていなかったから、鹿島愛の鞆に毒を入れた共犯者ではないので、この情報は信頼度が高い。それによれば——鹿島愛は配信での自殺を試みていたという」

「自殺ですってー?」

「ああ自殺だ。しかも、それによつて、安達有紀を救うはずだったらしい。自殺がどうして安達有紀を助けることに繋がるのかは後でまた話題にするよ。推測するに、彼女の自殺の筋書きはこうだ。ニンソウを蘭鍋の具材として持つてきて、それとは別にトリカブトの葉っぱを用意する。そして、食べる段階で自分の皿にトリカブトを盛り、食べる。そうすれば自分の持ち込んだものが実は毒でした、ちゃんちゃん、で終わりだ。彼女が犯行前から以上に緊張していたのは、安達有紀を殺したかったからじゃない。自分を殺したかったからだ。だが何のためか? 柏木梨々はこを教えてくれなかった。それだけじゃない。自殺するならいくらでも別の方法があったのに、何故そんなことをしようとした? 問題はまだある。じゃあ何故毒は安達有紀の所へ行った? 考えられる方法では、トリカブトが鹿島愛のお椀に無いことが説明できない」

説明できないことだらけじゃないか、そう思ったのは僕だけではなく、藤川警部と青原が口を挟んだ。

「おい和花。探偵(っ)こはほどほどにしろう……」

「そうですよ社長。梨々ちゃんの話が間違ってるって考えた方が疑問が少ないじゃないですか」

「そう。その意見ももつともだ。だが、ちゃんと答えを

見つけた。一番筋が通る答えをね」

だから黙つてくれないか、という心の声がみんなに聞こえたようで、文句を言っていた二人は押し黙る。

「鹿島愛は逮捕後、隠し持っていたトリカブト(実はニンソウ)を服した。これはいつから持っていた? 当然、本番の時からだ。たぶん予備として、袋に小分けしたトリカブト(実はニンソウ)を複数用意していたのだろう。実はニンソウのものをトリカブトとして用意していたということは、犯行時点、つまり配信開始より前に、誰かが、鹿島愛の鞆にあつたトリカブトだったものをニンソウに取り替えたということになる。誰かとは勿論——裏切つた共犯者だ。……だが待つて欲しい。共犯者の裏切りは、鹿島愛には明らかだつたはずだ。自分が死ななかつたのに安達有紀が死んだのなら、自分が盛られるはずの毒が安達有紀に行つた……つまり自分は無実なのに共犯者は殺人罪であるわけだ。だが彼女は共犯者を庇つた。何故?……そもそも、自殺に共犯者が要るのか?」

自殺に共犯者は大抵必要ない。そんな簡単な事実を思い出して僕は息を飲む。

「まさか!」

「そのまさかだ。彼女は共犯者を知らなかつた。彼女に共犯者などいなかった。いるとしても、自殺をほめかけた柏木梨々だけ。鹿島愛の一度目の自殺未遂と安達有紀の殺害とは、全く別の事件だつたんだ。鹿島愛は自分が死ぬはずの毒で何故助けるべき人が死んだのか分から

なかつた。自分の鞆に見覚えのないものがあるのを見て、誰かが自分の知らない所で何かをしていることは感付いたかもしれない。客観的に見れば、自分は濡れ衣を着せられただけだつた。だが主観的にはどうだろう。そこで無実を主張したとして、本当にそれは無実なのか。助けるべき人を助けられなかつた自分は、降りかかつた濡れ衣を払つてよいのか。のうのうと生きていられるのか。その思いが、彼女を偽りの自白に導いた。もちろん、ただ単に混乱してただけかもしれないけど。どちらにせよ、助けるべき人が死んでしまった、いや殺してしまつたのかもしれない。その認識が、鹿島愛を苦しめた。そして衝動的に自殺を試みた。安達有紀を助けるためではなく、安達有紀を助けられなかつたがために」

社長はそこで一息ついて、また僕達を見回した。鹿島愛が殺人者であるという汚名は、客観的には晴れたのかもしれない。だが、助けるべき人を助けられなくて、自分が殺人者でない、潔白だ、と主張することを、彼女は許せなかつたのかもしれない。

「鹿島愛の二度目の自殺未遂は、だが成し遂げられないはずだつた。何故なら彼女の持つていたトリカブトは、実はニンソウに、共犯者改め真の主犯によつて取り換えられていたからだ。つまり、鹿島愛の二度目の自殺未遂——いや、殺人未遂で使われた毒は、トリカブトではないということになる。よく考えてみると、安達有紀と鹿島愛が同じ毒トリカブトを服したなら、もうすこし症状が似通つてもいいはずだつた。だが、鹿島には安達に出た嘔吐が出ず、安達にでなかつた眩暈と発汗が発症した。別の毒とは何か。何に入つていたのか。簡単だ。逮捕後の鹿島が損つたのは——チアシードジュースだけ。

これに毒が入れられていたと見るのが妥当だ。そして、このチアシードジュースを作ったのは——」

社長はゆっくり人差し指を挙げ、ある人物に向ける。皆の視線が、その人に一斉に集まる。

「赤羽根翔子。君だ」

*

「チアシードって、毒なの？」

青原が翔子さんと社長を交互に見ながら言う。社長は顎を挙げて挑発的に翔子さんを見据え、翔子さんはじつと床の方に顔を向ける。表情は読み取れない。

「いや、チアシード自体に毒はないよ。毒があったら世の中にそんなもの流行らないだろうからね。中毒と言えらるまでにチアシードを摂取していた鹿島愛は、マネージャーにしばしばチアシード多めのジュースを作らせていたね。それを利用して、チアシードじゃなくて毒物多めのジュースを用意したんだ」

「で、でも社長。私たちの誰も、トリカブト以外の毒物は……」

「ああ、毒物なんて見つからなかったとも。けどね、赤羽根翔子は毒を持っていた。我々はそれを見逃した」

「そんな毒があるものか、何だ、言いなさい和花」

「あるよ。黒色の粒で、ある程度砕けばチアシードにうまく偽装でき、なおかつ持っただけでも誰も怪しまなかった、最高に都合のいい毒がね。なんだと思う？ 萩野」

「いや……」

「モロヘイヤの種だよ」

あつきり言い放つ。意外過ぎる毒の正体に、僕は驚く。翔子さんの様子はやはり伺えない。

「モロヘイヤの種は、家庭菜園用にどこにでも売ってはいくもの、実はストロファンチジンという強心配糖体……心臓に直接作用するタイプの毒を持つ。アフリカでは対ソウ用の毒矢として使われたほど強力な毒をね。赤羽根翔子、君は家庭菜園用にくっつかの植物の種を買って

きていたね。その中にモロヘイヤもあった。容疑者の中でモロヘイヤを持っていたのは君だけ……いいや、もつと言え、青原楓佳が買ったのは、枝豆とオクラ。種ごと実を食べる植物しか買っていない。有紀君が死んだときの持ち物検査ではモロヘイヤの種の袋は開いていなかったし、何より鹿島愛の荷物からトリカブトとその粉が見つかったから、君は疑いを免れ、本人の自白もあって皆に愛君が犯人だと——つまり自分は犯人ではないと認識させた」

翔子さんの返事はない。誰もが黙りこくっている。

「赤羽根翔子、あなたの今日の動きはこうだ。もともと君は、今日の配信で安達有紀を殺すつもりだった。君は小瓶に入れたトリカブトの粉を用意し、それを安達有紀に盛る。安達有紀が山菜を持つてくることは事前に知っていたそうじゃないか。この方法で中毒事故を装って殺そうとした。実際殺した。だがそこにはイレギュラーが入った。鹿島愛もまた、粉が葉かの違いはあれど、トリカブトを持つてきていたことだ。それに気づいたのは多分、18時半の少し前。鹿島愛がいつもよりも長く更衣室にいたことを不審に思い、そしてニンソウを持ってきていたことで疑問を確信に変えた。青原楓佳が、半より前に更衣室に入る君を目撃している。そのときに鹿島愛の鞆を漁り、トリカブトの入った小袋を見つけた。君はそれを鹿島愛が具材として持ってきたニンソウへと中身を変え、それを知らずに鹿島愛は本番直前に更衣室に向かい、袋を手にした。大きくは外れていないと思うが、どうかな？」

「……………」

「……答えてくれよ。まあいい、毒を盛ったタイミングは電気が落とされてすぐ。安達が虫を気にしていたあの

時だ。明るい時はライバーたちがアイマスクをかけていても、荻原がいたからね。迂闊なことではできない。暗い時は本当に暗くて、荻原は隣に赤羽根翔子がいるのかいないのかも分からないと言っていたね。いなかったんだよ。その時、翔子さんは暗視スコープを付けて安達有紀のお腕に毒物を注いでいたんだから。その暗視スコープは、鹿島愛の鞆に小瓶やら何やらを押し付ける時に自分の鞆に仕舞い、持っていくのを忘れたと言っただけだ。苦しう聞こえたとしても、鹿島愛の鞆から決定的な証拠が出てくるから問題はないって寸法さ」

そこまで言っただけで、言い切ったぞ、と言わんばかりに社長は鼻を膨らませて、挑発的な態度を崩さない。そこに注意を入れるかのように、藤川警部が口を挟む。

「和花。君が赤羽根さんを犯人だと言いたいのはよくわかった。が、実際にそうであるという証拠、そして動機がないと」

「証拠ならあるよ、父さん。完全じゃないけど。確かに、安達有紀殺害の件については、私の妄想かもしれない。だけれども、鹿島愛の殺人未遂なら、有力な——少なくとも任意同行を要請できる程度には有力な状況証拠が。赤羽根翔子は、何も証拠の偽装をしていない。愛君が倒れた時、自殺未遂だろうと最初から決めていた私達は連続殺人の可能性を棄却、有紀君殺害で容疑者だった人たちの持ち物を改めて調べなかった。赤羽根翔子の鞆には開封された量の減ったモロヘイヤの種の袋があるのね。認識上の犯人が明らかだったあの時なら、下手に隠すよりも堂々と持っていた方が良かったんだ。父さん、調べさせて」

と言われると、藤川警部は翔子さんを向く。何かを言おうとして、それを遮ったのは、他ならぬ翔子さんだった。

「もういいです……その通りです。私は、モロヘイヤの種の半分がどこに行っただか、なぜ無くなっているか、説明する術はありません」

「では犯行を認めるんですね」

「はい。」

探偵の時間が、終わった。そう言わんばかりに社長は挑発的な表情をやめ、目を閉じて息を吐こうとする。でも待つてほしい。僕には聞きたいことがあった。

「で、でも待つてください。理屈は分かりました。でも理由はどうなんです。翔子さんには、ふたりを手にかけてだけの理由があったんですか」

「あつたよ。それが最後のひとピースだ。この話は出来ればしたくなかったが、そうだね、動機として説明がつかような理由。知りたいかい」

「当然です」

「それが、この企業、そしてユニット・でとら〜くに今以上の影を落とすことになるとしても？」

「……っ」

そんなに暗い理由があるのか。大丈夫か、この会社。自分が聞くことで、もしかしたらとら〜くが瓦解するかもしれない。それでいいのか？

「お願いします。聞きたいです」

その時、そう言ったのは、青原だった。マネージャーよりも当事者である青原がそういうのでは、止める理由は無かった。社長もそう思ったか、観念して、

「そうか。話すしかないね。……これは、私の想像だ。そうであつてほしい。これは、鹿島愛がなぜ自殺しようとしたかが大きく関係するんだ」

それを聞いて、柏木の方がビクッと動いた。そうか、言いたくなかったことが、今明らかになるのか。

「鹿島愛が死ぬ、あるいは死ななくとも長期の離脱をする、どうなると思う？ ライバーとマネージャーの数関係を見れば分かる。荻野が担当していたのは青野楓佳ひとり、佐久間啓二が担当していたのも、鹿島愛ひとり。けれども赤羽根翔子は、安達有紀と柏木梨々のふたりを担当していたよね。そこから鹿島愛が死ぬならなりで抜けたらしたら、どうなる？ 佐久間啓一の担当する演者が0人になる。なら当然、赤羽根翔子の担当する2人のうち片方を、佐久間に担当させるよね。まあ、佐久間は今は離脱しているけど。とにかく、マネージャーの担当ライバーが調整される。これが目的だ。鹿島愛は自分の長期離脱によって、佐久間啓一が安達有紀の担当マネージャーになることを計画したんだ」

それに対して僕が聞く……が、途中で気付いてしまった。

「何故です。安達が佐久間のところに移動することが安達を助けることだなんて、まるで翔子さんのところにいるのが——あつ！ まさか！」

「そのまさか、だ。今日だけでもいい、彼女の言動を思い出せ。」

「貴方が私の安達有紀を殺したんじゃないのー？」

『柏木ちゃんは活動初期から私が持つてるけど、きちんと』

と頑張つて今や社長を追い落とす勢いになった。だから
有紀にも出来ないはずはない』

『何も変わったところなんてなかった。この私が言うの
だから間違いないわ』

「分かった？ 赤羽根翔子のマネジメントには、随分問
題がありそうじゃないかい」

柏木梨々は、肩を震わせている。翔子さんの表情は、
見る気にならない。

「赤羽根翔子は、自身のマネジメントに絶対の自信があ
り、そして厳しかった。そして、その厳しきは、『自分
のマネジメントによつて』大成功を収めた秋宮雛——よ
りも、『自分がマネジメントとしているのに』伸び悩む
寝ノ神こもり——安達有紀に向かった。だが彼女はそれ
に耐えられなかった。厳しく当たり散らして、伸びると
は限らない。安達有紀は厳しさを恐れて段々億劫になり、
それを見て赤羽根翔子は弛んでいるとますます叱り飛ば
す。この負のスパイラル、だんだんと苛烈を極める中で、
遂に安達有紀は鹿島愛に相談した。マネージャーを交換
してくれないか、とね。このとき鹿島愛は断つた。たぶ
んパワハラのごとは隠して単純に赤羽根さんと自分ほど
うも合わない、と穏便に言っていたんだらうし、そもそ
も演者側の一存で決められることじゃないから、当然と
言えは当然だ。だが二週間前、鹿島愛の担当だった佐久
間啓一が事故つて、全てが変わる。その時臨時のマネー
ジャーをしたのは赤羽根翔子だった。そして知つてしま

つたんだ。赤羽根翔子のパワハラ体質をね」

社長は上を向き、両手を天井の方へ伸ばした。大袈裟
な演技の様にも、心からの嘆きの様にも見える。

「鹿島愛はその後、柏木梨々か安達有紀のどちらかに事
情を聞いた。その結果、安達有紀のマネージャー交換の
相談は、単なる『合わないから代わつて』じゃない、心
からの助けの声だったことに気付いてしまったんだ。で
も、鹿島愛に何ができる？ 赤羽根翔子のマネジメン
トは苛烈だが優秀だった。迂闊な行動を起こせば、かえつ
て安達有紀を危機にさらしてしまう。彼女は悩んだ」

青原は信じがたいという表情だ。僕も、目の前で同僚
のパワハラとそれを巡る人間模様を聞かされると、自分
のマネジメントに不安を抱いてしまう。

「一方安達有紀は、柏木梨々とも相談していた。柏木
梨々も赤羽根翔子がキツイとは、多分分かつていたと思
う。話し合いの末に安達有紀は赤羽根翔子に苛烈すぎる
と抗議した。赤羽根翔子からしたら、自分の理想のマネ
ージャー業をしていたにすぎない。マネジメントとは管
理。自分の管理下・制御下・支配下に置くことが自身の
仕事だと信じていた。だが安達有紀はそれに付いてこれ
ないのをあろうことかマネージャーのせいにしてしま
っている。そういう風を感じたんだ。そしてその時に安達
有紀は、鹿島愛にも相談していることを打ち明けてしま
つたんじゃないかな」

痛々しい表情を、柏木は、強い少女は、浮かべている。
それを見て、後で青原と話し合つて、自分のことも正直
そうと強く思った。

「日頃の態度からわかるように、赤羽根翔子、あんたは
柏木梨々という人間を、内気なだけだと思つていただろ
う。だからきつと、こう言つた。『柏木は従順なのに、
お前ときたら』と。本当は柏木梨々も苦しんでいたこと
を知つていた有紀君は、ここで協力者として柏木の名を
出すことで、彼女に不利益が行くことを避けた。そして
その代わりに鹿島愛も同じ考えだと言つてしまった。そ
うして赤羽根翔子は、二人に矛先を向けた」

翔子さんは何も言うことはない。社長は翔子さんの方
をじつと見ている。つまらないものを見るような、哀れ
なものを見るような。怒りは感じない。

「鹿島愛の視点に戻ろう。彼女は遂に、自殺によるマネ
ージャーの変更を思い立つた。そして、安達により多く
の安息を与えるために、配信中の事故を装つて事務所自
体の当面の活動中止を狙つた。そしてそれを柏木梨々に
伝えた。もし柏木の方に移動の話が来ても辞退するよう
にお願ひしたんだ。そうすれば、佐久間の担当へ移動す
るのは確実に安達有紀になる。鹿島愛はその命を挺して、
安達有紀をパワハラから助けようとしたんだ。佐久間の
マネジメントが問題ないのは鹿島愛本人がよく分かつて
いたしね。でも」

社長がまた、嘆きのポーズをとつた。でも、そうはな
らなかつた。鹿島愛を襲つた悲しい現実が、僕らにも降
りかかる。

「でも現実はそのようにならなかつた。自分が死ぬつもりだ
つたのに、当の安達有紀本人が、その毒で死んでしまつ
た。鹿島愛はきつとこう思つただろうね、助けようとし

たはずの人間を、殺してしまった」。この衝撃は察するに余りある。そして生まれる、罪悪感。それは簡単に、結果として我々を攪乱させた嘘の告白を誘った」

「違う、わたしは、そんなこと」。最初に鹿島愛に疑いが向いたとき、彼女はこう言った。その時は私も往生際が悪い口上だと思ったけど、違った。あれは」

『違う、わたしは、そんなこと——するつもりじゃなかった。したくなかった』

「……そして、事実はすべて白日の下に晒された。真犯人は捕まり、鹿島愛は無実になった。そして——」

「そしてそこに、あまりにも可哀想な少女が一人。少女は身を賭して救おうとした友達を救えなかった。

少女はそれどころか自らを下手人だと思い込んだ。

少女は贖罪の念から公権力が下す罰を望んだ。

しかし少女は今、犯人として罪を償う機会を失った。

あとには、大切な友達を救えなかった悔いだけが残った」

「それで全部。それが全て。何もかも、完結だ」

*

藤川警部は部下に鞆を調べさせ、下を向いたままの赤羽根さんに何か言った後、出ていった。帰り際に何かを言うという事はなく、しばらくして警察が全撤収すると、後には社長と柏木、青原、僕、数人のスタッフだけが残された。

気付けば既に日付が変わりかけていた。誰もかれもが押し黙り、重苦しい雰囲気がある。切れかかっているどこかの蛍光灯が明滅し、そのたびにガラスを叩いたような音が部屋に響く。

柏木と青原は、競い合う仲間を失った。一人は死んで、もう一人も心的外傷を負った。

僕は、貴重な同僚を失った。仕事のできる人だった。まさか、殺しの手口もうまい人だったなんて。なにより、社長は大切な社員を失った。エンデュー社の運営から考えたら、演者もマネージャーも失うなど、痛手どころの話ではない。

「帰っていいよ、私は文書作りがあるから」

そう言って、社長は社長室のある二階へ降りて行った。

社長の目元が、一瞬だけ蛍光灯の光で煌めいた。

週末、社長に誘われて入院中の鹿島の見舞いに行くことになった。社長の車で直行するということから、てっきり柏木と青原もいるかと思っただけ、いなかった。

「しばらく引き合わせる気はないよ。各々の為にな」と、社長は言った。

寝ノ神こもりをどうするかは、まだ決まっていなかった。

配信中に食中毒かという話はネットに広がってしまった。いるから、対応が難しいのだという。今のところ死んだことは隠し、重篤なアレルギーが出て治療のため休止。そのまま引退というシナリオを考えているらしい。釈然としないが、仕方のないことなのかもしれない。

鹿島愛についても、当面休止とするらしい。というよりも会社全体で当面の活動休止とし、しばらくは現実と向かい合う時期にするのだという。毒物騒ぎを起こして活動休止を狙うという鹿島の狙いは、見事に遂げられた。悲しいことに、誰も救わない休止になってしまったが。

病院が見えてきたところで、運転席の社長が言う。

「一番心の整理がついてないのは、鹿島愛だな」

「ですよねえ……」

「二番目は私だよ」

「はは、笑えない……。実際今後どうするんですか？寝ノ神こもりとシェリー・シレンベルクの穴は大きすぎます」

「それなんだよねえ。二期生はまだ応募すら始まってないし、そもそも今回の騒動でうちの評判は失墜確定。二期生計画は当分先だ。あれかな、私の飲み友の元Vtuberにまたやらないかって声をかけてみるかね」

「ああ……ある程度ノウハウある人をデビューさせるのはありですね。それで、ちゃんと実力のある人なんですか？」

「問題ないよ。今は普通の企業で社畜してるけど、なんだったって元企業勢だ。それもあの、天下の——」

——そんな会話が、際限なく続いていく。社長の口から廃業の二文字は終ぞ出なかった。きっとこの先も出ることは無いのだろう。

病棟に見舞い、というものには、何度か訪れたことがある。高校時代、クラスメイトが骨折で入院したときが初めてで、一番新しいのは、祖父の最期の日の前の晩に、今夜が峠だから、というものだった。

一番新しいのが二十時に近い夜中の記憶だからかもしれないが、病棟と言うのは、いつも不自然なほど静まり返っている印象を受ける。ずっと遠くまで続いているかのような廊下に、コツ、コツと自分の靴の音が響くのを聞くと、すぐそのナースセンターに数人のナースが詰めているにもかかわらず、自分が孤独のうちに眩暈を起こして視界が下から白くなっていくかのような、どうにも形容の難しい寒気が身を包む。今回は社長が隣にいて、真つ唇間なのだけれど、やはり病棟の廊下の不気味さと言うのは影を潜める気はないようだった。

「ごご」

社長は何度か訪れたことがあるらしく、特段迷ったりすることもなく病室に辿り着いた。病室の前には、

「佐久間さん。退院できたんですね、おめでとうござい
ます」

「あつ、副社長。ありがとうございませす、帰ってきました。心配かけました。その……大変という言葉では形容できないような大事が起こったと聞きました。そのなかで五体満足でいらなかったこと、申し訳ないばかりです」

「いやいや、佐久間さんは運転にだけ気をつければいいんですよ」

そうやって怪我から復帰してから初めて会う佐久間の姿は、事故の影響をまだ引きずっているのか、痩せて元気がないように感じた。事故だけではないかもしれない。

「いや、社長から話を聞いてます。自分が鹿島さんの心にもっと寄り添えていたら。いやそもそも自分が事故を起こさなければ……」

「起こさなければ、赤羽根翔子のパワハラは露見せず、いつか堪忍袋が破裂してどのみち赤羽根翔子は凶行に踏み切つただろう。鹿島愛は悪くないし、佐久間、当然お前も悪くない。全ては不幸の出来事だ。そう、不幸のね……」

社長が割って入る。社長は悲しげな眼を病室のドアの向こうに向けた。

「佐久間、ここ数日はどう?」

「不安定です。暴れはしませんが、躁鬱が激しいというか。でも、今はまだ落ち着いています。お医者さんに止められていないし、面会していきますか」

病室はそこそここの広さを持ち、何人かが居ることが出来るようで、白いカーテンが開いた空のベッドがいくつか目に飛び込む。その奥、一番の窓際に、

「やあ、鹿島」

「じゃちよう……こんにちは」

明らかにげっそりしている女性がいた。

げっそり、というか、佐久間のそれをはるかに超えて不健康に痩せたように思える。喉を通る食事も少ないのだろう。かたわらには玉子交じりのお粥が置かれている。小さな皿に半分以上残されているお粥からは温かさを感ぜられない。

鹿島愛。はきはぎとして、それでいて冷静沈着。その振る舞いは育ちのいいどこかの令嬢のようで。そんな姿はほのかに感じはするが、みるからに影を潜めている。精神的に弱っていることは見るだけで伝わってきた。一

つ一つの所作が遅い。いつものようにニコリとして挨拶をするが、その笑顔はただ文字通り口角を挙げただけで手を振る腕も重そうだった。ただ、痛ましいという言葉のみが頭に浮かんで離れようとしれない。

「おぎのマネも。……ごめんなさい」

鹿島は僕達を見るなり目に涙を溜めはじめ、謝る。誰も謝罪を求めなどしていない。でも、この人は謝罪を望んでいる。誰かに許されることを願っている。

社長が、

「何も謝ることはないさ。お前は何も悪くない。悪いのは赤羽根だ。赤羽根があだも……」

社長が言うてはいけないことを言う。どこにトラウマがあるか分からないのにこの話をするべきではないだろうに。そう思った僕はとっさに社長の口を手で塞いだ。

「ゆ……き……ゆき……有紀。有紀! いや! 嫌!

私が。私なの、私に変な策を立てなければ! ううっ、有紀、許して。許して、ゆるしてええええええっ!」佐久間がバケツを持つ。鹿島の方に寄せた。鹿島は頭を青いプラスチックに包まれて嗚咽した。僕の手を離れた社長の口がまだ何か言おうとした。また塞ぐ。噛まれた。五分ほどしてようやく落ち着いた。

「ゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆるしてゆ——」

佐久間曰くこれで落ち着いているらしい。社長は、

「前途は遠く、そして暗い。しかし勇氣をもって進まねばならないんだ。現実と、そして自分の感情と向き合つた、その時は——また一緒に遊びましょう。バイバイ」と言つて、踵を返した。

スペシャル・サンクス(監修・協力・助言)

赤坂しぐれ

芋粥露青

南風こまち

母親

参考文献

自然毒のリスクプロファイル：高等植物：トリカブト—厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000082112.html>

見分け方のポイント(山菜)—山形県衛生研究所

http://www.eiken.yamagata.yamagata.jp/oldhp/rikagaku/sansai_miwake.html

Aconite—農研機構

https://www.naro.affrc.go.jp/org/niah/disease_poisoning/plants/aconite.html

Jute—農研機構

http://www.naro.affrc.go.jp/org/niah/disease_poisoning/jute.html

合田、酒井、中村他二名(1998):『食品衛生雑誌』39:256-265

濱口、平井、谷山他一名(1998):『日本獣医師会雑誌』51:407-410